大田市埋蔵文化財調査報告22

報告書用

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要10

●

［栃畑谷（とちはただに）地区・出土谷（だしつちだに）地区］

2000年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

石見銀山遺跡は島根県を代表する生産遺跡であり、日本の鉱山遺跡のなかでもその歴史と遺跡の保存状態の良さが高く評価されている文化遺産であります。

この遺跡の価値をさらに顕在化していくとともに、地域の誇れる文化財として保護し後世に継承していくために、平成８年度より石見銀山遺跡総合調査に取り組んでおります。島根県、大田市、温泉津町、仁摩町によるこの調査は、遺跡の発掘、科学、石造物、文献、民俗などの幅広い分野でおこなわれ、遺跡の全容を解明することが目的とされています。

遺跡の発掘調査につきましては、遺跡のある大田市大森町の皆様をはじめ、ご指導頂いております諸先生方や地権者の方々の協力によって、滞りなくすすめられ成果を上げております。このことは文化財保護行政を担う私共といたしましても大変喜ばしいことであり、深く感謝申し上げるところでございます。

本書は、平成９年度から11年度に調査をおこないました石見銀山遺跡のうちの栃畑谷地区、出土谷地区の調査概要の報告書であります。調査にご指導ご協力いただきました多くの皆様にお礼申し上げますとともに、本書が石見銀山遺跡に対するご理解と、今後の調査研究の基礎資料として活用されることを祈念いたします。

平成12年３月

島根県大田市教育委員会
教育長　大久保　昭　夫

例　言

1．本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。

2．調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となり、島根県教育委員会と共同で実施した。

3．本書の内容は、平成９～11年度の調査成果のうち、栃畑谷地区・出土谷地区についての概要をまとめたものである。

4．調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡発掘調査委員会〕

田中　琢（前奈良国立文化財研究所所長）　田中圭一（元筑波大学教授）
田中義昭（元島根大学教授）　脇田晴子（滋賀県立大学教授）
藤岡大拙（島根県立女子短期大学学長）　小寺八郎（同和鉱業㈱ 取締役管理副本部長：平成9～11年度）
澤田谷和（同和鉱業㈱ 総務部長兼秘書役：平成11年度）熊谷國彦（島根県大田市長）
安田増憲（島根県温泉津町長）　池亀　貴（島根県仁摩町長）
広沢卓嗣（島根県教育委員会教育次長：平成９年度）　山下嘉三（島根県教育委員会教育次長：平成10・11年度）

〔事務局〕

島根県大田市教育委員会　文化振興室

〔調査員〕

大田市教育委員会　大國晴雄・遠藤浩巳・中田健一
島根県教育委員会　広江耕史（平成９・10年度）・目次謙一・松尾充晶（平成11年度）

〔調査補助〕今西昭子・松尾賢二・山崎美和

〔遺物整理〕中川英子・波多野羽津美・高村玲子・森山裕子

〔調査指導〕

文化庁記念物課
奈良国立文化財研究所

5．下記の方々から多くのご教示、ご指導を頂いた。記して謝意を表すものである。（敬称略・五十音順）

朝尾直弘・池上 悟・小野正敏・神崎 勝・岸本直文・小池伸彦・坂井秀弥・高田 潤・松村恵司・村上安正・村上 隆・李 京华

6．挿図の縮尺は図中に示した。

7．挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。またレベル高は海抜高を示す。

8．第１図・第２図は建設省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。

9．本文中に使用した略号は下記のとおりである。

SB－建物跡　SD－溝跡　SK－土坑　SX－炉跡、特殊遺構

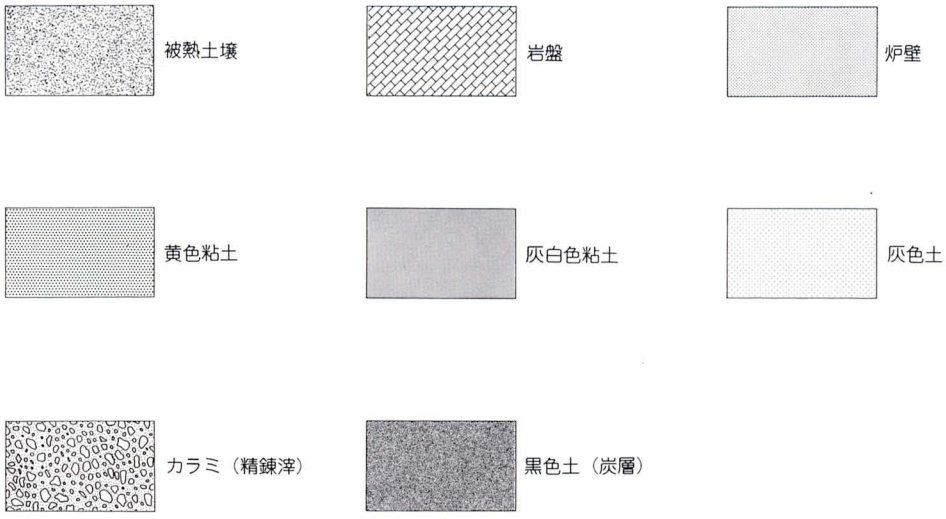
10．本書の執筆、編集は上記調査員のうち、遠藤・中田・目次・松尾がおこなった。

11．出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

凡　例

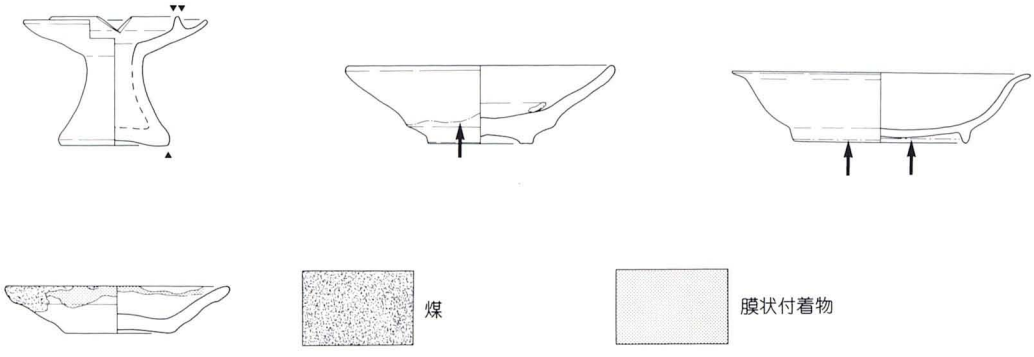
1．挿図中における表現は下記の基準で使用している。
　これ以外のものについては、個別に図中に示した。

〔遺 構〕



〔遺 物〕

・図中の▼印あるいは一点鎖線（図中↑箇所）は施釉範囲の境界を示す。



本文目次

第１章　位置と環境 …… 1

第２章　遺跡の概要 …… 3

第１節　石見銀山史抄 …… 3

(1)　戦国期の開発と争奪戦 …… 3

(2)　江戸期の石見銀山 …… 3

(3)　近代の鉱山開発 …… 3

第２節　石見銀山遺跡の概要 …… 5

(1)　銀山地区 …… 5

(2)　大森地区 …… 6

(3)　関連地区 …… 6

第３節　これまでの調査の概要と目的 …… 6

第３章　栃畑谷・出土谷の位置と環境 …… 9

第４章　栃畑谷地区の調査 …… 11

第１節　調査の経過と概要 …… 11

第２節　Ⅰ区の調査 …… 12

(1)　第１トレンチ …… 12

(2)　第２トレンチ …… 19

第３節　Ⅱ区の調査 …… 21

(1)　第１遺構面 …… 21

(2)　下層確認トレンチ …… 36

第５章　出土谷地区の調査 …… 41

第１節　調査の経過と概要 …… 41

第２節　Ⅰ区の調査 …… 42

(1)　第１トレンチ …… 42

(2)　第２トレンチ …… 43

第３節　Ⅱ区の調査 …… 46

(1)　第１遺構面 …… 48

(2)　下層確認トレンチ …… 64

(3)　カラミ（精錬滓）の分類 …… 67

第６章　まとめ …… 70

第１節　栃畑谷地区の調査 …… 70

第２節　出土谷地区の調査 …… 71

附．参考資料 …… 73

挿図目次

第１図　石見銀山遺跡位置図（Ｓ＝１／150,000）…… 1
第２図　石見銀山遺跡分布図（Ｓ＝１／25,000）…… 4
第３図　栃畑谷・出土谷周辺地形測量図（Ｓ＝1／1,000）…… 10
第４図　栃畑谷地区　調査区配置図（Ｓ＝1／800）…… 11
第５図　栃畑谷Ｉ区１Ｔ　全体平面図（Ｓ＝1／60）…… 12
第６図　栃畑谷Ｉ区１Ｔ　全体土層図（Ｓ＝1／60）…… 13
第７図　栃畑谷Ｉ区１Ｔ　ＳＸ０１平面図（Ｓ＝1／20）…… 14
第８図　栃畑谷Ｉ区１Ｔ　出土遺物実測図①（陶磁器）（Ｓ＝1／3）…… 15
第９図　栃畑谷Ｉ区１Ｔ　出土遺物実測図②（金属・石製品）（Ｓ＝1／2・1／1・1／6）…… 17
第10図　栃畑谷Ｉ区１Ｔ　出土銭貨拓影（Ｓ＝1／1）…… 18
第11図　栃畑谷Ｉ区２Ｔ　平面・土層図（Ｓ＝1／60）…… 19
第12図　栃畑谷Ｉ区２Ｔ　出土遺物実測図（陶磁器・土器）（Ｓ＝1／3）…… 20
第13図　栃畑谷Ⅱ区　全体平面図（Ｓ＝1／100）…… 21
第14図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＢ０１平面図（Ｓ＝1／60）…… 22
第15図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＢ０１断面図（Ｓ＝1／60）…… 23
第16図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＢ０２平面・断面図（Ｓ＝1／60）…… 24
第17図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＢ０２下層平面・土層図（Ｓ＝1／30）…… 26
第18図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＸ１３平面・土層図（Ｓ＝1／20）…… 27
第19図　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物実測図①（陶磁器・土器）（Ｓ＝1／3）…… 29
第20図　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物実測図②（陶磁器・土器・石製品）（Ｓ＝1／3）…… 31
第21図　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物実測図③（金属製品）（Ｓ＝1／2・1／1）…… 32
第22図　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物実測図④（製錬関連土製品）（Ｓ＝1／3）…… 33
第23図　栃畑谷Ⅱ区　出土銭貨拓影（Ｓ＝1／1）…… 34
第24図　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　平面・土層図（Ｓ＝1／60）…… 36
第25図　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　遺構平面・土層図（Ｓ＝1／20）…… 37
第26図　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　出土遺物実測図①（陶磁器・土器）（Ｓ＝1／3）…… 39
第27図　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　出土遺物実測図②（製錬関連土製品）（Ｓ＝1／3）…… 40
第28図　出土谷地区　調査区配置図（Ｓ＝1／800）…… 41
第29図　出土谷Ｉ区１Ｔ　平面・土層図（Ｓ＝1／60）…… 42
第30図　出土谷Ｉ区２Ｔ　平面・土層図（Ｓ＝1／60）…… 43
第31図　出土谷Ｉ区２Ｔ　ＳＸ０５平面・土層図（Ｓ＝1／10）…… 44
第32図　出土谷Ｉ区１Ｔ　出土遺物実測図①（陶磁器・土器）（Ｓ＝1／3）…… 45
第33図　出土谷Ｉ区１Ｔ　出土遺物実測図②（鉄製品）（Ｓ＝1／2）…… 45
第34図　出土谷Ｉ区２Ｔ　出土遺物実測図（陶磁器・土器）（Ｓ＝1／3）…… 46
第35図　出土谷Ⅱ区　平面・断面図（Ｓ＝1／80）…… 48・49
第36図　出土谷Ⅱ区　ＳＸ０１平面・土層図（Ｓ＝1／30）…… 50
第37図　出土谷Ⅱ区　ＳＸ０２平面・土層図（Ｓ＝1／10）…… 51
第38図　出土谷Ⅱ区　ＳＸ０４平面・土層図（Ｓ＝1／20）…… 52・53
第39図　出土谷Ⅱ区　ＳＸ０４出土遺物（炉壁・カラミ）（Ｓ＝1／3）…… 54
第40図　出土谷Ⅱ区　ＳＸ０５平面・土層図（Ｓ＝1／20）…… 55
第41図　出土谷Ⅱ区　ＳＸ０６平面・土層図（Ｓ＝1／20）…… 57
第42図　出土谷Ⅱ区　出土遺物実測図①（陶磁器）（Ｓ＝1／3）…… 59
第43図　出土谷Ⅱ区　出土遺物実測図②（陶磁器・土器・土製品）（Ｓ＝1／3）…… 60
第44図　出土谷Ⅱ区　出土遺物実測図③（大型遺物：陶磁器・土器・石製品）（Ｓ＝1／6）…… 61
第45図　出土谷Ⅱ区　出土遺物実測図④（石製品・鉄製品・土製品）（Ｓ＝1／2・1／1）…… 62
第46図　出土谷Ⅱ区下層確認トレンチ　平面・土層図（Ｓ＝1／40）…… 65
第47図　出土谷Ⅱ区下層確認トレンチ　出土遺物実測図（陶磁器・石製品）（Ｓ＝1／3・1／6）…… 66

本文写真目次

写真１　栃畑谷Ⅱ区 調査前状況（南から）…… 11
写真２　栃畑谷Ⅰ区 周辺石垣（北から）…… 13
写真３　栃畑谷Ⅱ区 ＳＢ０１調査風景（西から）…… 23
写真４　栃畑谷Ⅱ区 ＳＸ１４・１５（北から）…… 25
写真５　栃畑谷Ⅱ区 ＳＫ０８（東から）…… 25
写真６　栃畑谷Ⅱ区 ＳＤ０３（北から）…… 28
写真７　栃畑谷Ⅱ区 西側下層状況（北から）…… 28
写真８　出土谷Ⅱ区 調査前状況（北東から）…… 46
写真９　出土谷Ⅱ区 東南側石垣 …… 47
写真10　同 石材部分 …… 47
写真11　出土谷Ⅱ区 石臼と黒色石粒 …… 49
写真12　出土した方解石 …… 56
写真13　出土谷Ⅱ区 ＳＸ０３（北西から）…… 58
写真14　カラミ各種 …… 68

表目次

表　1　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ 出土遺物観察表① …… 16
表　2　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ 出土遺物観察表② …… 17
表　3　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ 出土銭貨観察表 …… 18
表　4　栃畑谷Ⅰ区２Ｔ 出土遺物観察表 …… 20
表　5　栃畑谷Ⅱ区 出土遺物観察表① …… 30
表　6　栃畑谷Ⅱ区 出土遺物観察表② …… 30
表　7　栃畑谷Ⅱ区 出土遺物観察表③ …… 33
表　8　栃畑谷Ⅱ区 出土遺物観察表④ …… 33
表　9　栃畑谷Ⅱ区 出土銭貨観察表 …… 35
表　10　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ出土遺物観察表① …… 38
表　11　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ出土遺物観察表② …… 40
表　12　出土谷Ⅰ区１Ｔ 出土遺物観察表 …… 45
表　13　出土谷Ⅰ区２Ｔ 出土遺物観察表 …… 45
表　14　出土谷Ⅱ区 出土遺物観察表…… 63・64
表　15　出土谷Ⅱ区下層確認トレンチ 出土遺物観察表 …… 66
表　16　カラミ分類表 …… 67
表　17　カラミ観察表 …… 67
表　18　カラミ種類別重量比 …… 69

写真図版目次

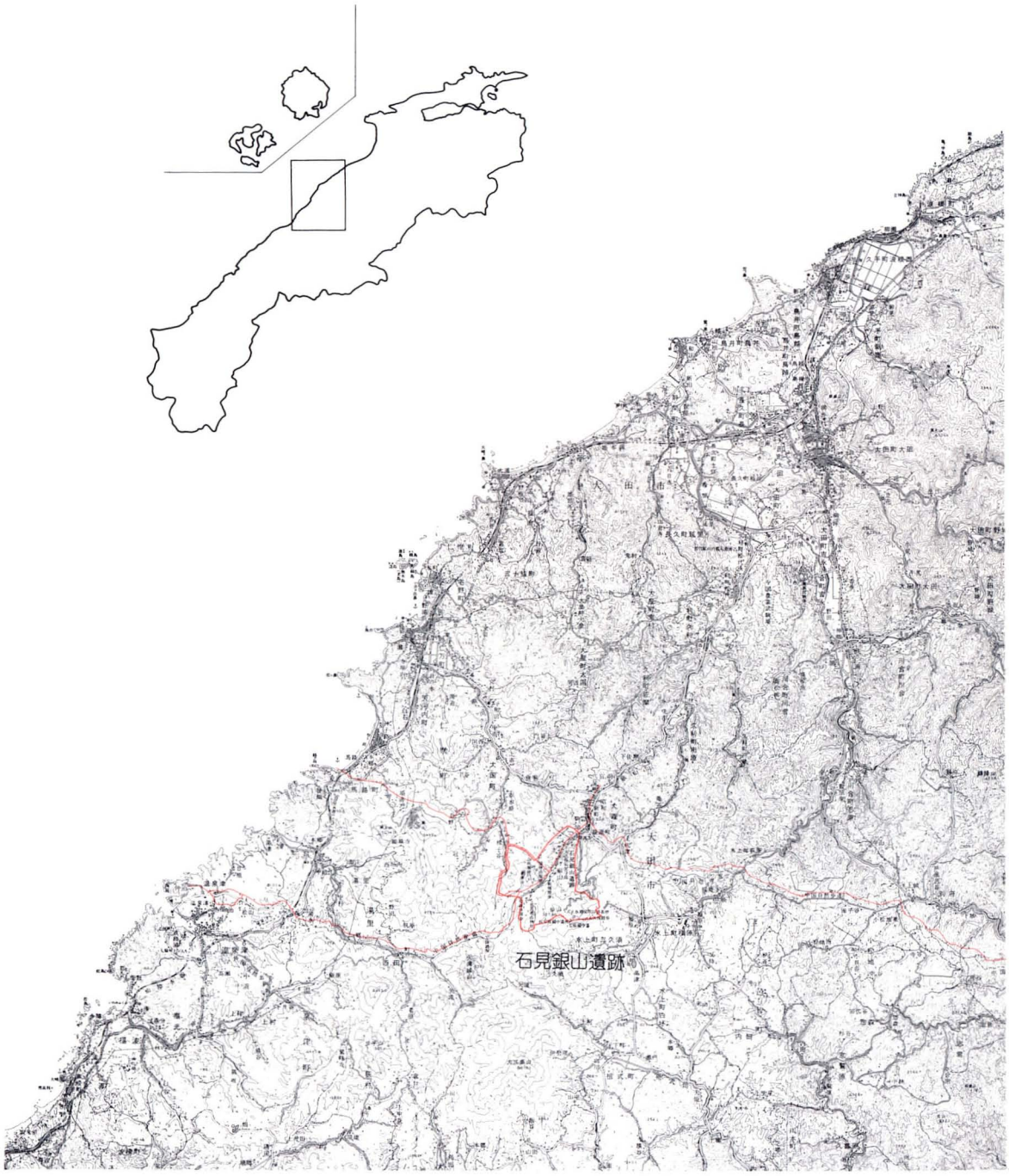
ＰＬ．１　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ：調査区全景（西から）、東側石垣（北から）
ＰＬ．２　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ・２Ｔ：栃畑谷Ⅰ区１Ｔ ＳＸ０１（北から）
栃畑谷Ⅰ区２Ｔ 調査区全景（北から）
ＰＬ．３　栃畑谷Ⅱ区：調査区全景（北から）、ＳＢ０１（北から）
ＰＬ．４　栃畑谷Ⅱ区：ＳＢ０１内 遺構群（南から）、ＳＫ０１（南から）
ＰＬ．５　栃畑谷Ⅱ区：ＳＢ０２ 部分（東から）、ＳＢ０２下層の遺構（南から）
ＰＬ．６　栃畑谷Ⅱ区：ＳＸ１３（北から）、下層確認トレンチ内 ＳＤ０２（東から）
ＰＬ．７　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ：出土遺物（１～24）
ＰＬ．８　栃畑谷Ⅰ区２Ｔ：出土遺物（39～48）、栃畑谷Ⅱ区：出土遺物①（49～63）
ＰＬ．９　栃畑谷Ⅱ区：出土遺物②（64～87）
ＰＬ．10　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ・Ⅱ区出土銭貨（25～38、88～102）、栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ 出土遺物（103～134）
ＰＬ．11　出土谷Ⅰ区１Ｔ：調査区全景（西から）、南側石垣（南から）、出土遺物（135～141）
ＰＬ．12　出土谷Ⅰ区２Ｔ：調査区西側部分（西から）、ＳＸ０５（北から）、出土遺物（142～148）
ＰＬ．13　出土谷Ⅱ区：出土谷を望む（北西から）、調査区全景①(南東から)、調査区全景②(北東から)
ＰＬ．14　出土谷Ⅱ区：ＳＸ０１（南東から）、ＳＸ０２（南西から）
ＰＬ．15　出土谷Ⅱ区：ＳＸ０４（南東から）、ＳＸ０２検出時（南東から）、
ＳＸ０４内出土 炉壁・カラミ
ＰＬ．16　出土谷Ⅱ区：岩盤加工遺構・ＳＸ０５（北東から）、ＳＸ０６（北東から）
ＰＬ．17　出土谷Ⅱ区：出土遺物①（149～170）
ＰＬ．18　出土谷Ⅱ区：出土遺物②（171～201）
ＰＬ．19　出土谷Ⅱ区：出土遺物③（202～216）
ＰＬ．20　出土谷Ⅱ区下層確認トレンチ：第３層（粘土層）検出時（東から）、
第４層(カラミ層）検出時（北西から）、下層石垣（北西から）
ＰＬ．21　出土谷Ⅱ区下層トレンチ：トレンチ北西側壁面、下層石垣（北東から）、出土遺物（217～227）
ＰＬ．22　遺物集合写真：栃畑谷Ⅱ区、出土谷Ⅱ区

第１章　位置と環境

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高537ｍ）は、北東から南西に細長く伸びる島根県のほぼ中央、日本海から直線距離にして約６㎞の地点で、旧「石見國」の東部に位置している。

仙ノ山の北西にある要害山（標高414ｍ；山吹城跡）との間を銀山川が北東方向に流れ、大田市内を貫流、大田市久利町で静間川と合流して日本海に注ぐ。この銀山川によって形成された河岸段丘に集落が形成され、仙ノ山山麓の狭長な谷間では大田市大森町の町並みが展開している。大森町の標高は、町並みの北東に位置する代官所跡付近で110ｍ、南西の龍源寺間歩付近で230ｍを測る。

仙ノ山の南方４㎞の地点には大江高山（標高



第１図　石見銀山遺跡位置図（Ｓ＝1／150,000）

808m；火山）が位置し、付近には標高400mから600mの山塊が群をなしている。そこに源を発する河川も多く、南流して江の川に注ぐ河川では、祖式川、飯谷川、右原川、大家川などがある。北西方向の温泉津町を貫流するものでは湯川の支流群、北方向では潮川の支流である柑子谷川、狭平川、冠川などがあげられ、それぞれの河川による渓谷に可耕地や小集落を形成している。

海岸部に近い山塊群による景観から、石海・石美あるいは石群に「石見」の語源があるともいう。山地帯に細長い河岸段丘と河口に形成された狭い沖積平野を特徴としているため、歴史的な背景において地域的な特色を育んできた。

「石東」（石見東部）といわれる大田市、温泉津町、仁摩町においてもその歴史的な地域性を見出すことができる。縄文時代では、潮川河口に近い坂灘遺跡や善興寺橋遺跡、その上流1kmの古屋敷遺跡、西へ2kmの海岸部にあるクネガソネ遺跡、鳥居原遺跡などがあげられる。善興寺橋遺跡では、中期に石見に分布する「波子式」と呼ばれる縁帯文土器が出土している。

弥生時代では、潮川の河岸に位置している川向遺跡で中期の円形杭列遺構が検出された他、海岸部丘陵上に展開する鳥井南遺跡において、多数の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代後期には石見唯一の家形石棺を納めた明神古墳が著名である。潮川下流域の丘陵に位置しているこの古墳からは、金銅装円頭大刀や銅鋺が出土している。また、仙ノ山から南へ3kmに位置している白坏遺跡では古墳時代の下駄や竪穴住居、古代における木簡やヘラ書・墨書の土器が出土している。

律令制支配がゆるんだ後には、中央権門の大規模な荘園である大家荘や、石見国衙の在庁官人による別名が多数成立した。この結果小規模な領主が台頭することとなり、惣領制が衰退した後の南北朝期には抗争が繰り返されたともいう。また、海運の発達により多くの津・湊が成立し、その近辺には市庭が形成された。史料では仁万津・温泉津・福光湊などが知られている。戦国期になると石東には銀山領有をめぐる争奪戦によって、城館が多数つくられた。

中世から近世では以下の遺跡が注目される。潮川の中流にある白石遺跡では、掘立柱建物跡が11棟検出され、12世紀後半から14世紀代の青磁や白磁などの貿易陶磁、土師質土器が大量に発見された。また、古屋敷遺跡では中世から近世の遺構が多く見つかり、中世では掘立柱建物跡12棟、土壙5基、溝状遺構4条を検出、近世では建物跡4棟、土壙13基、石組遺構1基などが検出されている。石組遺構中からは「石銀」のヘラ書きのある陶磁器も出土している。

江戸時代に至ると石東の安濃郡・邇摩郡全域は邑智郡・那賀郡の一部と、石見西部の鹿足郡笹ヶ谷・日原・美濃郡都茂などの鉱山とともに石見銀山領となり、全期間を通じて天領として直轄支配され、維新後には大森県を経て石見一円の浜田県に含まれた。

ところで、中世から近世にかけて海外で制作された日本地図に、銀山の記載があることが知られている。1595年アントワープで制作されたオルテリウス／ティセラ型日本地図では「石見」（Hivami）の国名を記した近くに、地図で唯一「銀鉱山」（Argenti fodinæ）と記されている。

多量の銀を産した仙ノ山周辺の鉱床は新第三期大森層中に胚胎し、石英安山岩中に鉱脈鉱床の永久鉱床、同角礫岩中には鉱染鉱床の福石鉱床がある。永久鉱床は仙ノ山西側栃畑谷地区や昆布山谷地区に賦存、鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主とし、輝銀鉱、自然銀などを伴う。福石鉱床は仙ノ山山頂から東側の石銀地区や本谷地区に賦存。鉱石鉱物は自然銀、菱鉄鉱を主体とし黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まないことが特徴とされる。

第２章　遺跡の概要

第１節　石見銀山史抄

(1)　戦国期の開発と争奪戦

石見銀山は鎌倉時代の末期、延慶２年(1309)に周防の大内氏により発見されたという伝承がある。その後本格的な開発は大永６年(1526)に博多の豪商神屋寿禎と出雲鷺銅山の山師三島清右衛門が始めたという。『銀山旧記』は「三人の穿通子吉田与三右衛門、同藤左衛門、於紅孫右衛門を引連れ銀峰山の谷々にて石を穿ち、地を掘りて大に銀を採り、寿亭皆収め取り九州に帰りけり」と記している。天文２年(1533)には寿貞が博多から慶寿という精錬技術者を連れてきて銀精錬法「灰吹法」を石見に導入、これ以後産銀量は著しく増大したという。

銀山は大内氏が支配下に置く大永年間(1521～28)以降、永禄５年(1562)に毛利氏が銀山を掌握するまで、山口の大内氏、川本の小笠原氏、出雲の尼子氏等により激しい争奪戦がおこなわれたことが『銀山旧記』『陰徳太平記』などから知られる。毛利氏の銀山支配は休谷の山吹城大手に位置する休役所が拠点となり、石見吉川氏により管理されていた。この時期の銀山経営の実態は不明な点が多いが、『毛利家文書』などから、年間産銀量は数百貫以上あったと推定されている。その後、天正12年(1584)には豊臣秀吉と毛利氏が銀山を共同管理することになった。

石見銀は銀山が佐摩村にあったことから「ソーマ(Soma)銀」と呼ばれ、海外にも多量に輸出され、中国などの東アジア諸国とポルトガルやスペインなどのヨーロッパ諸国を交易で結ぶ決済通貨となった。16世紀の詳細は不明だが、17世紀前半における産銀量は年間約１万貫（約38トン）に及ぶと推定され、世界の産銀量の1／3を占めていたといわれる日本銀のかなりの部分を産出していたと考えられている。

(2)　江戸期の石見銀山

慶長５年(1600)、徳川家康は関ヶ原の戦いの直後に大久保長安と彦坂元正を石見に派遣し、銀山を毛利氏から接収した。銀山奉行となった大久保長安は荷分制という経営手法と甲州流の鉱山技術によって大増産を果たし、銀山は慶長から寛永期に最盛期を迎える。なかでも山師安原備中が開発した釜屋間歩は毎年3千600貫の銀を産したという。

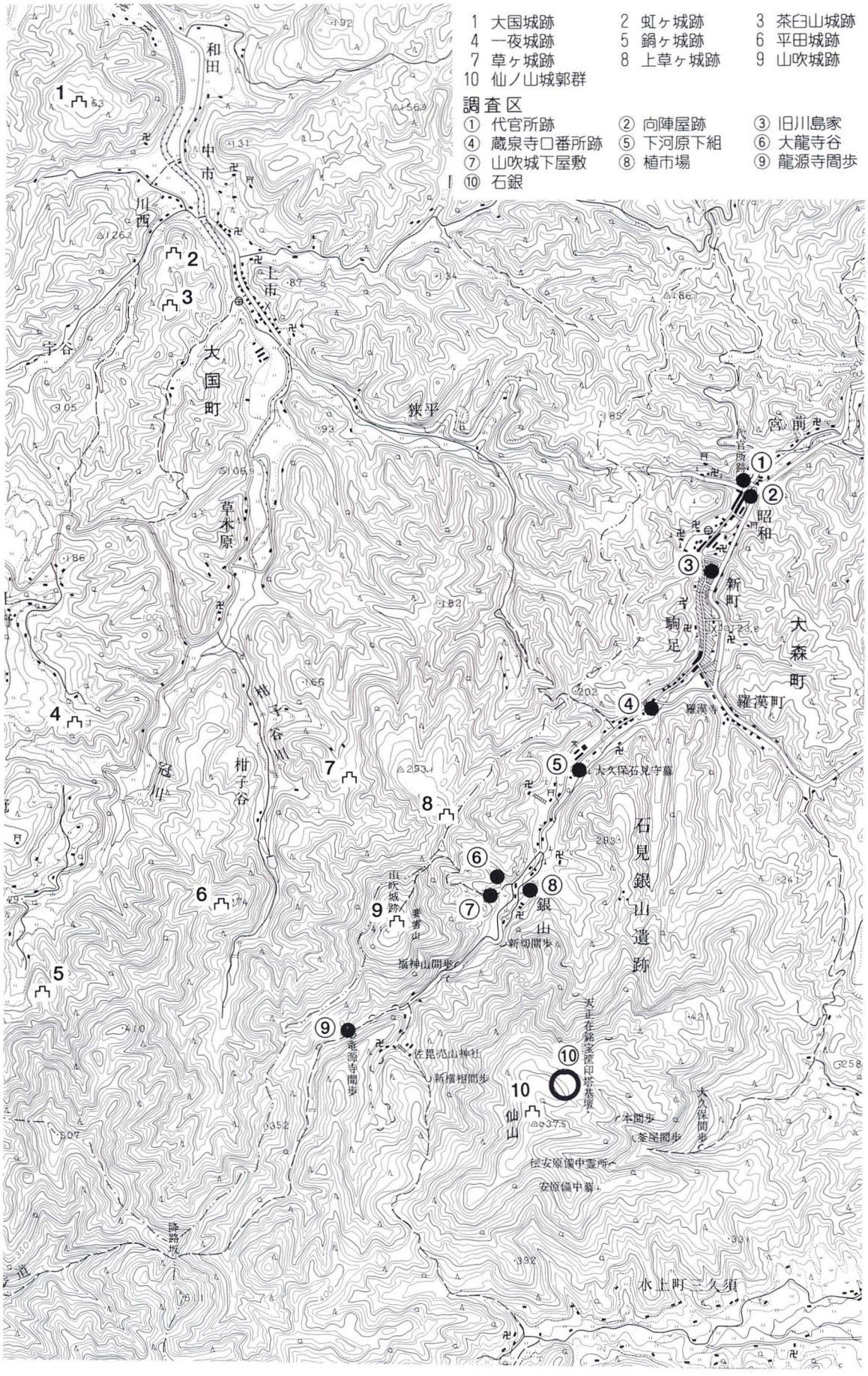
銀山経営を支える仕組みとして、元禄年間(1688～1704)頃より石見銀山領の村々のうち佐摩村を中心とした周辺の邇摩郡・安濃郡・邑智郡に銀山御囲村32ケ村が設定され、坑内の支柱(栗材)、精錬や坑内作業に必要な炭、縄、叺などを供出することが義務付けられた。それぞれの坑道の経営方法は慶長初期頃から奉行所(代官所)直営の御直山と、山師の請負山である自分山があった。御直山の経営は公費から資金・資材が提供され、鉱石を一定の割合で公儀・山主・銀掘りに荷分けされるもので、その割合は時代により変遷があった。

寛永期以降になると次第に坑道が深くなり、湧水処理に経費がかかるようになり延宝年間(1673～1680)になると産銀量は年間約４百貫に減り、幕末の安政６年には30貫と記録にある。

江戸期を通じて奉行・代官・預りが59人あり石見銀山附御料約４万８千石の統治と銀山の管理をおこなっている。

(3)　近代の鉱山開発

明治維新後、石見銀山は太政官布告により地元に払い下げられ小規模な経営が続けられたが、明治５年(1872)の浜田沖地震で坑道はほとんど水没し、全山休山状態となった。明治19年合名会社藤田組が１鉱区の借区権を買取り、翌20年には全鉱区を買取り、仙ノ山南の銀山部（本谷鉱区）で採掘が開始された。この時から大森鉱



第2図　石見銀山遺跡分布図（S＝1／25,000）

山となり、鉱山事務所を銀山部におき、24年からは邇摩町柑子谷の永久部（永久鉱区）に製錬所が建設された。28年には清水谷に収銀湿式法による新製錬所が建設され操業を始めたが、翌29年に良鉱が得られなかったことなどにより休止することになった。開発の中心は永久部となり、同35年には発電所を建設、電動式ポンプによる揚水で再び活況を呈した。

主要産品は銅で、日清・日露戦争の軍需景気に乗り隆盛をみた明治後期から大正初期には、柑子谷は一大鉱山町に発展した。大正6年(1917)の大森鉱山の従業員は約700名であったと記録されている。しかし第一次世界大戦後の反動景気により銅価が下落、その上安価な外国産銅におされ、ついに大正12年(1923)6月に休山に追い込まれた。昭和16年(1941)国の援助で再開発をおこなったが、同18年山陰地方を襲った大水害により、柑子谷は地形が変わるほど土砂が堆積し、坑道も水没して再開発は断念され、現在に至っている。

第2節　石見銀山遺跡の概要

石見銀山遺跡は大田市大森町を中心に、周辺の仁摩町、温泉津町などを含めた広い範囲に分布し、特に銀山跡がある大森町には遺跡が集中する。遺跡は大きく銀山地区と、石見銀山や銀山御料に関する行政、通商の機能を有していた大森地区、および周辺に点在する石見銀山に密接に関わる関連地区からなり、生産遺跡を中心に、人々の生活や銀山の統治に係わる様々な遺跡から構成される。遺跡の年代が中世から近代まで約400年に及び、重層性、複合性をもつ遺跡の集合体であることが石見銀山遺跡の特徴となっている。

(1)　銀山地区

銀を産出した鉱山跡と、銀生産に携わった多くの人々が居住し、生産と生活に係わる物資が多量に流通・消費された鉱山町遺跡である。

【生産遺跡】探鉱・採鉱・製錬の遺跡。間歩分布調査では、露頭掘り跡が47か所、坑口跡526か所が確認されている。採鉱遺跡の分布は銀を中心とした福石鉱床と銀・銅のある永久鉱床の賦存と一致している。坑道掘りの代表的な遺跡として、国指定史跡の大久保間歩、釜屋間歩、本間歩、龍源寺間歩などがある。製錬の遺跡として、発掘調査で検出された石積みの水溜めや溝などの選鉱に関連する遺構、炉跡・鉄鍋・石鉢などの精錬に関連する遺構・遺物がある。

近代の遺産としては、製錬所跡、トロッコ道、変電所跡などが知られている。

【生活遺跡】仙ノ山一体に広い範囲で大小の平坦面（テラス）が認められ、そのほとんどが住居兼工房と推定されている。発掘・分布調査、文献等から石銀集落跡、栃畑谷集落跡、下河原集落跡、上市場集落跡、休谷集落跡などがあり、これ以外にも銀山七谷を中心に多くの集落跡が存在する。

【城館遺跡】戦国期銀山争奪戦の拠点となった要害山に築かれた山吹城跡がある。仙ノ山の北西に谷を隔てて位置し、主要な郭は北西から南西にかけて伸びる尾根上に集中する。要害山の南東、休谷に面して大手があり、戦国期の毛利氏領有期には銀山管理の休役所が置かれ、現地には役所跡の長大な石垣がのこされている。

【支配関連遺跡】戦国期の休役所跡は、江戸時代に初代銀山奉行となった大久保長安の奉行所となり、周辺には御銀蔵や吹屋などが所在したといわれる。江戸時代銀山には仙ノ山を取り囲むように柵列が築かれ、10か所の口番所が置かれた。発掘・分布調査によりそれぞれの番所の位置と蔵泉寺口番所跡では柵列の遺構と推定される石列が確認されている。また幕府直営の坑道の入り口に置かれた四ツ留役所跡が龍源寺間歩坑口前の発掘調査で検出されている。

【信仰遺跡】寺院が約70、境内をもつ神社が数か所あり、祠や石造物なども多数認められる。寺院は寺跡が確認できるものが20数か寺あり、由来は不明であるが地名として残っているものが多数を占めている。石造物調査では龍源寺間

歩上墓地や妙正寺墓地などにおいて墓標を中心とした石造物の分布調査や実測調査により、形態や葬地の変遷などが明らかにされている。栃畑谷に位置する佐毘売山神社は、別当寺として神宮寺をもつ、神仏混淆の社殿・境内と神楽殿を有している。

【歴史的町並み】山組頭、銀山附役人遺宅などが残る、鉱山操業時以来の歴史を引き継ぐ町並みがある。

(2) 大森地区

近世初頭に銀山町を柵内、大森町を政治・経済の町として区分し、代官所、向陣屋など銀山御料の統治関連施設や郷宿、御用商人宅などがある。

【支配関連遺跡】代官所跡には文化12年(1815)普請の表門と門長屋が現存している。代官所跡地南側の発掘調査では蔵跡と推定される石列が検出されている。また周辺には手代・手付役宅があった向陣屋跡、馬場跡、御銀蔵跡、中間長屋跡などがある。

【歴史的町並み】郷宿、地役人、町年寄、同心遺宅や寺社などが残る、銀山操業時以来の歴史を引き継ぐ町並みがある。町並みは街道に面して塀を建て主屋を奥まった場所に設けている武家屋敷と、街道に面して主屋、土蔵、塀を連ねる町屋が混在するのが特徴となっている。また信仰遺跡である寺院跡や墓地・供養塔などの石造物がある。

(3) 関連地区

大田市大森町に隣接する仁摩町、温泉津町には銀生産と物資の流通などにより結ばれた、関連する遺跡が存在する。

【城館遺跡】山吹城跡周辺には数多くの山城があり、代表的な城跡として、矢滝城跡、矢筈城跡、石見城跡、鵜丸城跡、櫛山城跡がある。このうち鵜丸城跡、櫛山城跡は中世の港として繁栄した温泉津町の沖泊港入り口に築かれた海城である。鵜丸城跡は築城の経緯が文献に記された城として知られ、元亀元年(1576)に毛利氏の命により、毛利水軍の拠点として築かれたといわれ、銃陣を敷くための三段の帯郭を備え、大手に桝形虎口を用いた縄張りに特徴がみられる。

【港湾遺跡】戦国期から近世に銀鉱石の搬出や銀山への物資搬入港であった鞆ケ浦、沖泊、古柳、温泉津、小浜などがある。鞆ケ浦、沖泊には船を係留するための、海岸の岩盤を加工した「鼻ぐり岩」が多数残されている。

【支配関連遺跡】江戸時代、国境や交通上・警備上の要衝地に配置された口番所、船表番所がある。詳細については不明である。

【交通遺跡】銀山と流通上必要な地を結んだ街道がある。街道調査により、戦国期に銀鉱石を搬出した鞆ケ浦〜銀山ルート、戦国期から近世に銀山の外港となった温泉津〜西田〜銀山ルート、近世に銀の大坂納めのために確立した大森〜赤名〜尾道ルートなどが明らかにされている。現地には街道跡とともに石畳や石段、道標などの遺構が存在することが確認されている。

【生産遺跡】銀山に鉄と鉄製品を供給した製鉄遺跡が数多く存在するが、大規模なものとして仁摩町宅野の達水鉄山所跡がある。また銀山で使用される石造物や建築材となる石材を切り出した温泉津町福光の福光石石切場跡がある。

【歴史的町並み】銀山への物資搬入の拠点港として港町、そして温泉町として栄えた歴史をもつ温泉津の町並みがある。廻船問屋遺宅や寺社、廻船問屋の廟式墓地などが点在している。

第3節　これまでの調査の概要と目的

石見銀山遺跡において発掘調査が開始されたのは石見銀山遺跡総合整備計画策定事業に伴って、昭和58年度の蔵泉寺口番所跡推定地と代官所南地区の調査からであった。調査の目的としては「拠点地点での遺構確認と保存・整備の資料を得る」と報告にあるように、トレンチによる調査で、下層遺構の確認は行っていない。

調査の結果、蔵泉寺口番所跡では明確な遺構が確認されなかったという。また、代官所南地

区では自然石積みと切石の石列等を検出、近世初頭から幕末に至る肥前陶磁、地元産陶器が出土した。現存する代官所長屋門とほぼ平行な位置関係にあることと、天保12（1841）年の代官所絵図から代官所に関連する建物跡と考えられている。

昭和58年以降、発掘調査は一時中断したが、昭和62年に町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定され、整備と活用事業に伴って調査が行われるようになった。

昭和63年度には龍源寺間歩遺跡が発掘され、龍源寺間歩の坑口付近の平坦地が調査されている。坑口東側の平坦地（Ⅰ区）では、第1遺構面で建物跡2棟を確認、下層遺構面では建物跡1棟が確認された。第1遺構面では建物内にピットや炉跡状の土坑を検出、遺物ではノミなどの工具が出土したという。下層遺構面に至る整地土中には陶磁器類・寛永通宝等が出土し、厚さ40～50cmと報告されている。下層遺構面では炉状の集石遺構と18世紀代の陶磁器が出土、他に暗渠のような排水施設と、岩盤を穿った溜枡状遺構とピットが検出されている。

坑口西側の平坦地（Ⅰ区）では、第1遺構面で建物跡1棟、第2遺構面で建物跡1棟、第3遺構面では岩盤加工遺構が検出されている。時代はそれぞれ近代、江戸時代、及び戦国期の可能性、が指摘されている。調査報告【資料3】では地区名が「龍源寺間歩四ツ留役所跡」に変更されている。

平成元年度は向陣屋跡、蔵泉寺口番所跡、上市場集落跡の3カ所が調査されている。向陣屋跡では1.5×3.5mのトレンチを2カ所設定、掘り下げをおこなっている。土層観察によって明褐色粘土質土が堅く締まることから、向陣屋に関連する遺構面と考えられている。また、多数出土したいぶし瓦のうち、本瓦葺の軒瓦が含まれていたことを根拠に、江戸時代の建物が存在していた可能性が指摘されている。蔵泉寺口番所跡の調査では、Ⅱ区において表土から30～50cmのところに方向の違う石列が検出された。北東～南西方向に伸びる石列は、銀山を囲んだ柵列と推定されている。遺物は16世紀中頃から19世紀代と幅広く、整地層中のものが多い。上市場地区では戦国から明治までの3つの遺構面を確認、陶磁器の組成などから「生産よりも消費が中心となった商人の「町」に関連する遺跡」と推定されている。

平成2年度は元年度からの継続で蔵泉寺口番所跡、そして新たに大龍寺谷地区と旧河島家敷地内が調査されている。蔵泉寺口番所跡では、16世紀後半から19世紀前半の遺物が出土。16世紀第4四半期～17世紀前半の遺物から、番所が江戸時代に入り整地・構築されたことを裏付けると評価されている。

大龍寺谷地区では17世紀前半が中心で16世紀第3四半期の遺物が出土している。Ⅱ区ではノミと要石の出土から坑夫が住んだ建物跡と推定されている。また、建物の規模や性格については不明な点が多いが、掘立柱建物跡という構造から鉱山労働者の住居と工房という性格を兼ね備えていたとも推測されている。

旧河島家敷地内の調査は、「河島家」南側の空地を調査した。表土から50cmで遺構面を確認、井戸跡、石組みの柱穴状遺構、石列を検出した。近世初頭頃の出土遺物から寛政の大火以前における江戸時代初頭の建物に関連する遺構とされている。

平成3年度は下河原下組地区の調査が行われた。石銀地区の調査を除けば最も広く調査された例である。遺構は礎石立てによる間口の狭い建物跡で、炉跡などを伴い近世初頭の銀の精錬所とみられ、下河原吹屋跡とされた。また、からみの科学分析から、マンガンを多量に含有するものがあることが判明、造滓剤としてマンガンが使用されていたことが確認されている。

平成4年度は、山吹城下屋敷地区の調査が行われた。6カ所のトレンチによるもので、字限図から、現存の高さ10mの長大な石垣及びその西側平坦地を休役所と推定、第2トレンチにて確認したところ、礎石を2つ確認。16世紀末か

ら17世紀前半の遺物より、戦国期の休役所か、江戸時代大久保長安の奉行所と推定されている。また第5トレンチで炉跡2基を検出している。遺物は鏨、分銅があり、17世紀初頭前後から17世紀前半という年代観が陶磁器から導かれている。

平成5年度からは仙ノ山山頂の石銀地区の調査が開始される。平成5～7年度に調査された石銀千畳敷南向山地区では、谷中央の道跡を挟む形で建物跡2棟を確認。建物内に炉跡や選鉱施設とみられる土坑等を検出し、精錬に関する建物（吹屋）と推定。さらに下層には戦国期に遡る遺構の存在を明らかにした。

この石銀地区の調査を契機として、平成8年度からは島根県教育委員会と大田市教育委員会との合同調査となり、発掘調査委員会が組織される。「採鉱と精錬の技術体系の解明を調査の柱とし、400年に及ぶ鉱山都市の実態を明らかとする」ことを目的に調査計画を立案、加えて科学的調査を発掘調査と同時並行で進めるという画期的な連携によって、石見銀山遺跡解明に向けての進展が図られた。

平成8年度から石銀藤田地区の調査を開始、翌平成9年度には下層確認トレンチの戦国期の遺構面から鉄鍋が出土。科学的調査の結果、灰吹きに使用されたことが明らかとなった。石銀藤田地区の調査は平成10年度まで継続され、採掘から精錬までを行っていた状況や、遺構面が最も多いところで9面あることを確認。また、谷の中央に水路を伴った道が整備され、建物が連続して立ち並ぶ状況が判明した。他にゆりかす・カラミや炉跡・土壙の土壌についても、科学分析のデータが蓄積されつつある。

発掘調査委員会では、仙ノ山一帯の鉱山遺跡としての解明を進めるため、石銀地区以外の操業の拠点となったいくつかの地区のうち、特に戦国期から開発が始まったといわれる出土谷地区、栃畑谷地区、於紅ケ谷地区等で調査を行う必要性が指摘された。

これをうけて出土谷地区は平成9年度から、栃畑谷地区・於紅ケ谷は平成10年度から調査に着手した。出土谷地区は、文献史料では戦国期に灰吹法を伝えた慶寿が居住し精錬をおこなった場所、といい、その後も内田正重がこの谷を領有し精錬をおこなった、という。また、鉱山の信仰の中枢である佐毘売山神社に隣接することから、戦国期からの製錬の中心であったと考えられてきた。栃畑谷地区は、出土谷地区と同様に、戦国期からの精錬工房が存在する可能性や「京町」、「京店」といった地名に表れる「町」が形成された地域である、とも指摘されてきた。

この二つの地区は、仙ノ山山頂の石銀地区平坦地群とは大きく異なる立地や、文献史料上の記載とあわせ、石見銀山遺跡の全体像を窺い知る上で、重要な地点といえよう。

ゆえに、これらの地区の調査は戦国期の銀生産工房が存在するのかを主たるねらいとし、連続する谷間の平坦地の実態解明を目的とした。

調査報告【資料3】は、以上述べてきた昭和58年から平成10年度の調査結果をまとめ、特に島根県教委・大田市教委の合同調査のうち、石銀地区の報告書とした。今回は調査概要として栃畑谷・出土谷地区を報告するものである。

第３章　栃畑谷地区・出土谷地区の位置と環境

栃畑谷地区・出土谷地区は仙ノ山西麓に位置する調査地区である。二つの調査地区はそれぞれ栃畑谷、出土谷に位置し、谷の名称をもって調査地区名としている。栃畑谷は南北に伸びる狭隘な谷で北側で大谷に接している。谷の東側は仙ノ山西斜面、西側は矢滝城山から北東方向に派生する急峻な尾根によって挟まれ、谷のほぼ中央を山神川が北流し、大谷で銀山川に合流する。出土谷は栃畑谷が大谷と接するあたり、佐毘売山神社の裏に位置する南東方向に伸びる谷で、栃畑谷から分岐する昆布山谷と尾根を挟んで、北側に並行している。二つの谷とも銀山開発とともに造成されたと考えられる平坦地が連続して分布し、それらの中には石垣を伴うものが散見される。現在の植生はほとんどが竹林となっている。栃畑谷・出土谷については戦国期から史料上に見え、出土谷は昆布山谷の範囲の一部であったことが史料などから推測される。

栃畑谷・出土谷には、採鉱の遺跡である露頭掘り跡や坑道掘り跡がみられ、代表的な坑道に栃畑谷に今泉坑、妙像寺坑、上四坑が、出土谷に隣接する昆布山谷には新横相間歩、村上坑が知られる。二つの谷には鉱滓のカラミの散布が広く確認されることから、平坦地については精錬施設の存在が予測されている。

栃畑谷から昆布山谷が分岐する地点に、精錬の祭神である金山彦命を祀る佐比売山神社（山神宮）が鎮座している。寺院は現存しないが、栃畑谷に神宮寺、妙像寺、妙本寺、蓮教寺、昆布山谷に長楽寺、長福寺、虎岸寺、出土谷の入り口に西福寺などが存在したといわれ、墓標・石仏などの石造物が多数遺されている。

栃畑谷の初見史料は、大永２年(1522)の大田南八幡宮に納められた経筒銘の「栃畑フキヤ与三左衛門生国備中十五日」である。昆布山谷については、文禄５年(1596)の「おべに孫右衛門ゑんき」に「天文八年八月四日、大水出来候而、昆布山の頭よりつゑぬけ候而、千三百余人流れ候」とあるのが初見である。「高野山浄心院過去帳」(『上野武三家文書』)には、戦国期から江戸時代に栃畑谷・昆布山谷の二つの谷に住んだ人々の名前が記載されているが、その中に居住地名を併記するものがある。栃畑谷には「京店」「京町」「フロヤノ段」「フキ屋ノまえ」「仏谷」が、昆布山谷に「出し土」がみられる。また「銀山旧記」には精錬技術者である吹大工の「采女丞」「大蔵丞」が昆布山谷にて銀を精錬したことや、天文年間の初めには「長崎より唐人なりと来たり住す、朽多（栃畑）の頭に唐人屋敷、唐人橋という名あり、色々の唐細工栃畑鍔」といった記述がある。戦国期銀山の最盛期には、栃畑谷・昆布山谷（出土谷）一帯は、銀山の製錬の中枢であるとともに、京店・京町と呼ばれるような町が形成され、多様な職種の人々が居住し往来するといった都市的な場であったと推測される。

銀山は江戸時代17世紀の後半以降、盛衰を繰り返しながら衰退へと向かう。それと共に近世から近代に寺社の多くが合併や合祀、あるいは転出しており、この二つの谷も例外ではない。製錬の規模や町が徐々に縮小していったことを反映していると考えられる。

近代になると、石見銀山は明治政府の官営鉱山とはならず、明治６年(1873)に安達惣右衛門が民営鉱山「銀山製鉱所」として経営を始めている。明治20年になると藤田組が「大森鉱山」として清水谷に事務所を置いて本谷鉱区と永久鉱区の操業を始めることになる。明治33年には栃畑谷に三木工場と関連する諸施設が建設されたといわれるが、詳細な記録は知られておらず、現地には大規模な石垣と工場の施設などが遺跡としてのこっている。

第３図　栃畑谷・出土谷周辺地形測量図（Ｓ＝1／1,000）

16cm

第４章　栃畑谷地区の調査

第１節　調査の経過と概要

栃畑谷地区は、その歴史的・地理的環境から銀山開発当初より近代に至るまでの遺構・遺物が存在すると、かねてより指摘されてきた。過年度に実施された分布調査でも栃畑谷集落跡として把握され、16世紀代から集落が存在したと推測されている。石見銀山遺跡発掘調査委員会（以下委員会）の各委員からもこれらの点が注目され、調査の必要性が指摘されていたところである。

そこで平成10年度から新規に調査を実施することとし、平成10年５月13・14日に開催された第６回委員会で各委員により了承された。調査は６月12日よりＩ区から開始し、続いて24日からはⅡ区の調査を始めている。Ｉ区第２トレンチ（約10㎡）の調査は８月６日をもって終了し、埋め戻しを行った。その後８月27日には調査成果を記者公開し、11月29日に開催した現地説明会には約40人が訪れた。10月26・27日には奈文研・松村考古第二調査室長の、同じく30日には奈文研・村上主任研究官の指導を受けた。11月６日には第７回調査委員会が開催され、Ｉ区・Ⅱ区それぞれの建物跡と遺構全体の様相・時期的な位置づけや、近代の藤田組施設との関係について指導を受けた。Ｉ区第１トレンチ（約25㎡）およびⅡ区（約160㎡）の調査は来年度に継続することとし、平成10年度の調査は12月14日で終了した。

平成11年度の調査は、Ｉ区を５月18日から、Ⅱ区を５月10日から開始した。６月10日には、奈文研・村上主任研究官から遺物の保存処理や遺構からの分析試料採取についての指導を受けた。Ｉ区第１トレンチは範囲を広げて約40㎡を調査した後、６月15日に埋め戻しを完了して調査を終了した。またⅡ区ではＳＢ０２下層の製錬遺構を中心に調査を行い、８月10日に終了した。

写真１　栃畑谷Ⅱ区　調査前状況（南から）

第４図　栃畑谷地区　調査区配置図（Ｓ＝1／800）

第２節　工区の調査

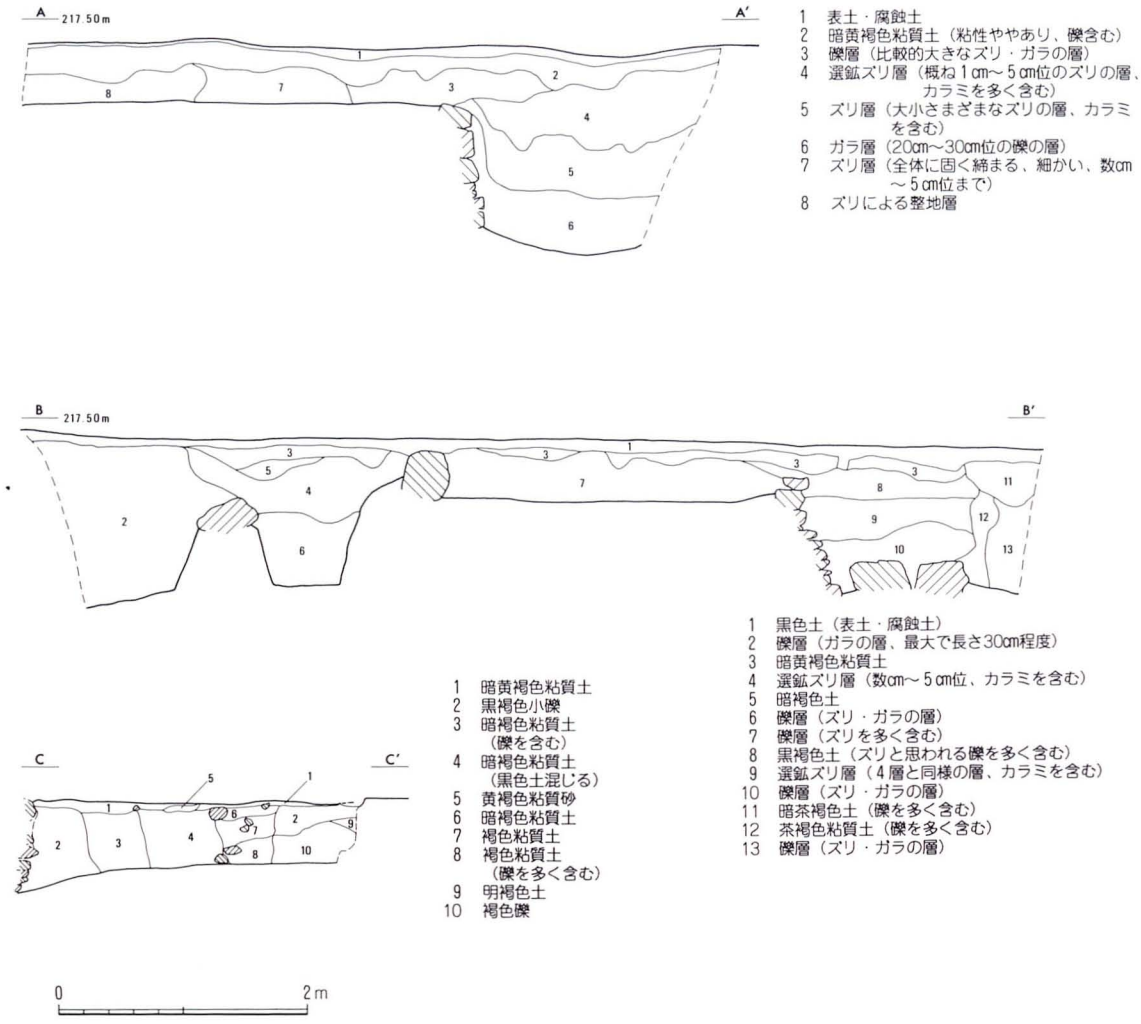
(1)　第１トレンチ

栃畑谷Ｉ区は佐毘売山神社の北西、山神川右岸の市道大森三久須線に面している平坦地である。調査地には一部杉の植林がみられるが、近代まで民家が建っており、現地には井戸が１基のこされている。またこの平坦地の北側斜面裾には坑口が開口している。

第１トレンチは杉の立木を避けて、幅２ｍで設定した「Ｔ」字のトレンチで、面積は約25㎡である。第１トレンチの層序（第６図）をみると、表土（黒色土）の下層の暗黄褐色粘質土が礫を含む粘性のある締まった土層であることから、これが整地層となり上面が遺構面になると観察された。まずこの面を精査し遺構検出をおこなったが、明確な建物基礎などの遺構は検出しなかった。出土遺物の年代のほとんどが近代のものであることから、この層が近代まで存在した民家建築の基盤層になると考えられたが、遺構については建物が廃棄、撤去され、最終的な整地が行われたことで、その痕跡をとどめなかったものと推測される。

調査はこの暗黄褐色粘質土層を掘り下げ、層序を確認しながら、遺構の検出をおこなった。暗黄褐色粘質土層の下層はほとんどが鉱石の選鉱過程で廃棄されたズリの礫層で、ズリの単純層だけでなく、精錬滓のカラミを包含する礫層もある。これらの礫層は調査区付近での選鉱、精錬作業に伴って廃棄されたものが整地に用いられたと考えられ、調査地での作業に伴うもの

第５図　栃畑谷Ｉ区１Ｔ　全体平面図（Ｓ＝1／60）



第6図　栃畑谷Ⅰ区1Ｔ　全体土層図（Ｓ＝1／60）

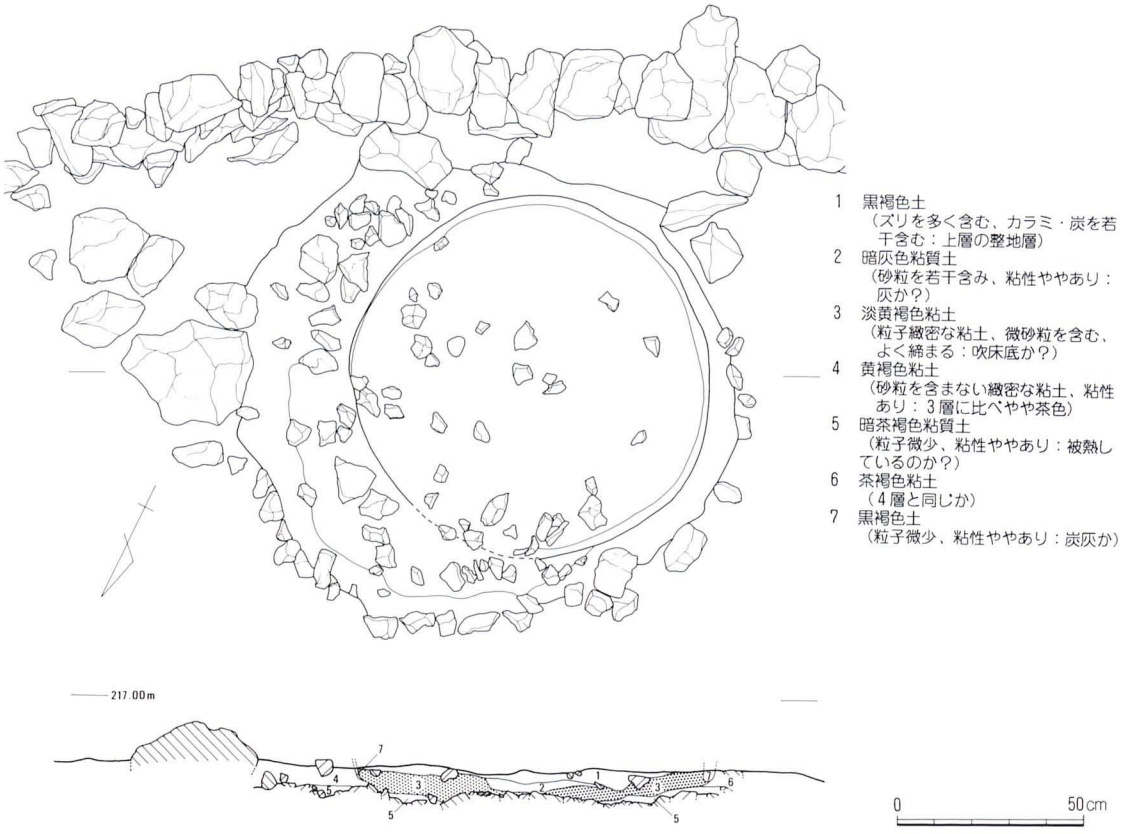
とは考えにくい。

掘り下げの過程で検出した遺構に調査区の中央から南よりの地点に位置する東西方向に延びる長さ約3.5mの石垣と、調査区の中央やや東よりの地点で検出した南北方向に延びる長さ5.4mの石垣がある。（第5図）

東西方向の石垣は、拳大から最大で30cm前後の礫を3～4段に高さ約0.4mに不規則に積み上げたもので、北側が露出面となる。南北方向の石垣は、拳大から最大で60cm前後の礫を6～9段に高さ約1.4mに不規則に積み上げたもので、東側が露出面となる。二つの石垣とも近代の建物の整地により上部が破壊されたと考えられ、本来はこの石垣を伴う平坦面が現表土よりも高い位置に存在したと推測される。

礫層の下層は、同様にズリ、カラミを含む暗褐色土層となり、この上面で石垣とＳＸ０１を検出した。石垣は調査区の北西地点に位置する東西方向に延びる長さ約1.7mを測るもので、拳大から最大で30cm前後の礫を6～7段に高さ約1.0mに積み上げている。露出面は北側と考えられ、この石垣は東に延びて南北方向の石垣に繋がるものと推測され、復元するとこの二方

写真2　栃畑谷Ⅰ区　周辺石垣（北から）



第7図　栃畑谷Ⅰ区1Ｔ　ＳＸ０１平面図（Ｓ＝1／20）

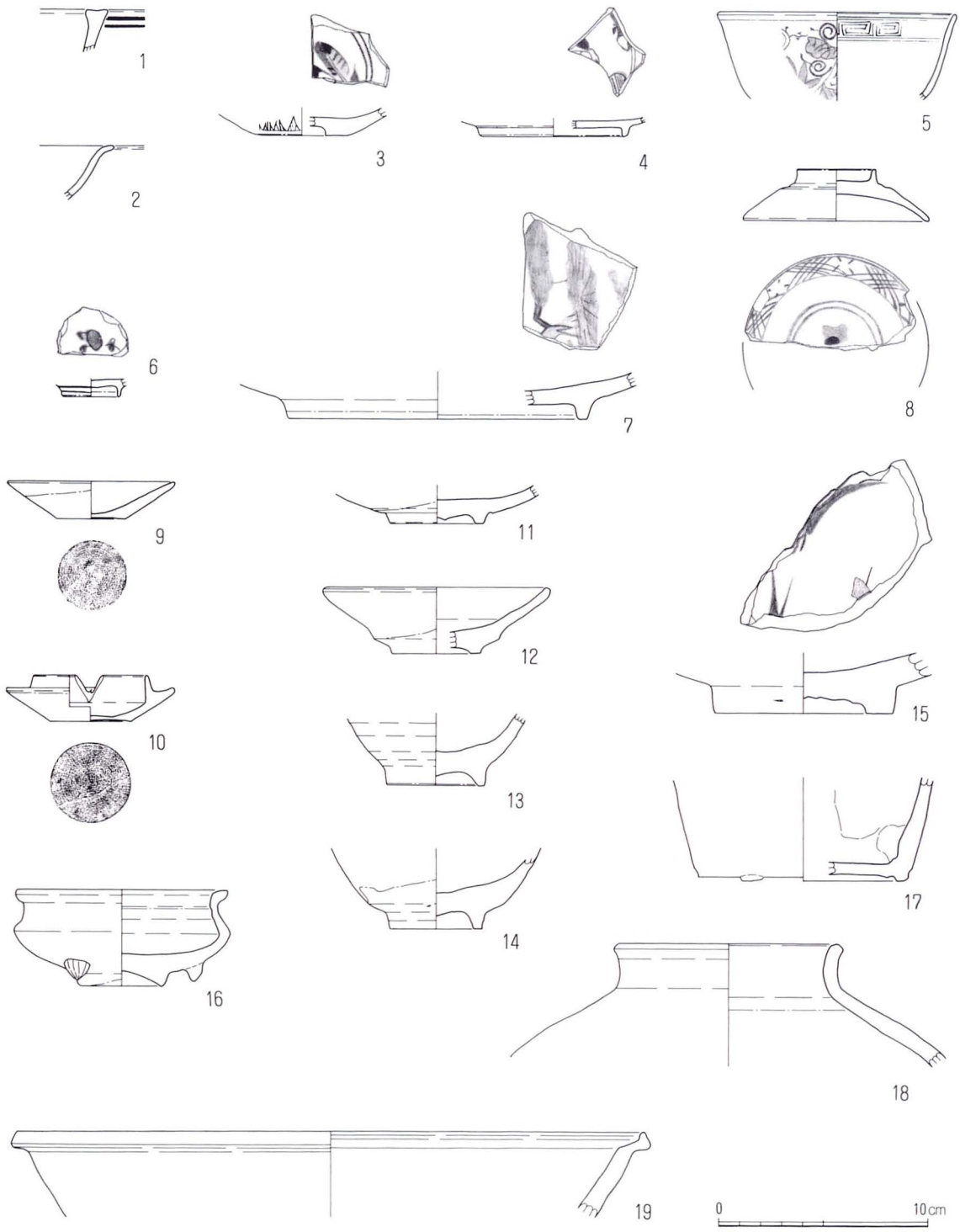
向の石垣によって一つの平坦面が形成されていたと考えられる。

ＳＸ０１は調査区の中央やや西よりの地点で検出した炉跡である。（第７図）粒子が緻密でよく締まっている淡黄褐色粘土（３層）が、直径約95cmの円形の範囲にあり、その周囲を幅１～６cmの黒褐色土（７層）が縁取りをするように廻っている。この黒褐色土の周りは、砂粒を含まない緻密な粘土である黄褐色粘土（４・６層）が検出された。淡黄褐色粘土が円形の範囲にあることや、淡黄褐色粘土と黄褐色粘土が緻密であることが、これまで検出された精錬遺構と共通する特徴であることからＳＸ０１は精錬施設の遺構になると考えられた。

ＳＸ０１の構造を調査するために、東西方向にトレンチを設定し、裁ち割り調査をおこなった。土層を観察すると、円形の淡黄褐色粘土の上層には、灰の可能性がある粘性のある暗灰色粘質土（２層）の堆積が一部みられる。また淡黄褐色粘土の周囲を廻る黒褐色土は、ＳＸ０１の中心に向かってやや傾斜するように、淡黄褐色粘土に接している。淡黄褐色粘土の下層は、粒子が微小な暗茶褐色粘質土（５層）となり、その下層は、10cm前後の大きさの礫を敷き詰めたような状況であった。

ＳＸ０１の構築の復元を試みると、礫を敷いた上に暗茶褐色粘質土をのせ（上面を焼成した可能性あり）、直径95cmの円形の範囲を除き礫を入れながら黄褐色粘土を炉壁として築き、淡黄褐色粘土を炉底とし、炉壁に炭灰の黒褐色土を貼り、炉が構築されたものとみることができないだろうか。科学分析の結果を併せた検討が必要となっている。炉の用途については、江戸時代後期の鉱山技術書に記載された、炉の規模や構造を比較しながら検討すると、灰吹炉が直径三尺（約91cm）の規模で築かれること、２層が灰と観察されることから、灰吹床の可能性があると指摘しておきたい。

栃畑谷Ⅰ区で検出された遺構については、石垣を伴って整地された平坦地に、ＳＸ０１の存



第８図　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ　出土遺物実測図①（陶磁器）（Ｓ＝1／3）

在が示すような精錬施設をもつ工房建物などが建設されていたと考えることができる。調査地の南に位置する地表に露出した石垣（写真２）を観察すると、Ⅰ区で検出した石垣と積み上げる礫の大きさや積み方が類似しており、山神川沿いに面して階段状に平坦地が並んでいた可能性がある。

【第１トレンチ出土遺物】（第８図）第１トレンチの遺物は、多くが大小の礫層から出土している。礫層出土遺物をみてみると、16世紀後葉から17世紀代にかけてと時期幅があるものの、上層遺構面出土の遺物とは時期が重ならずひらきがある。この点から、礫による整地が17世紀代のある時点で集中的になされたことがうかがえる。図化しえなかった遺物の中には、瀬戸・美濃の小皿がある。胎土が陶器質の粗製青花碗・

表1　栃畑谷Ⅰ区1Ｔ　出土遺物観察表①

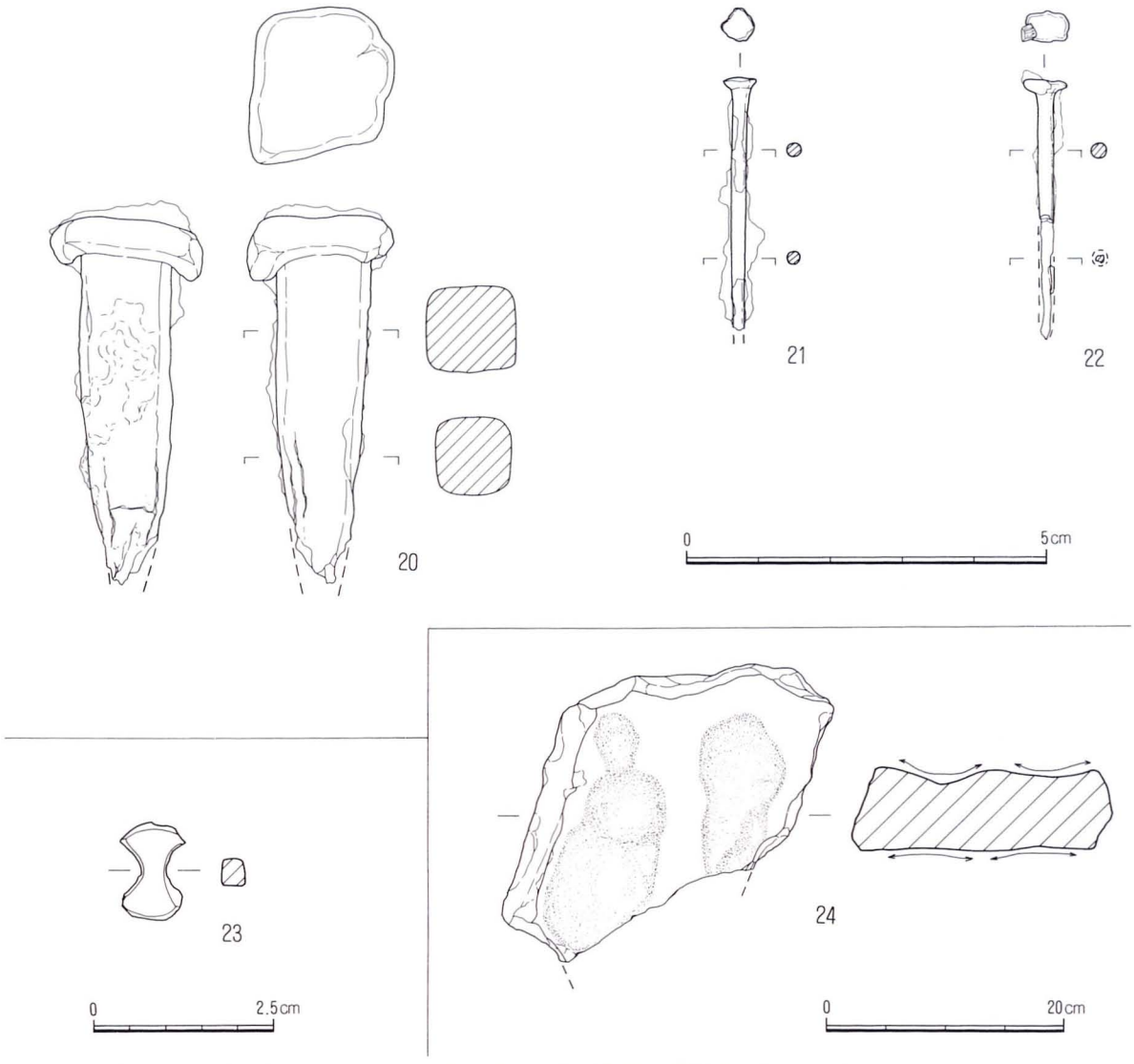
図面番号	遺物番号	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	技法／文様／その他	推定生産地	残存量
8	1	青磁・碗					中国	口縁部片
	2	白磁・皿					中国	口縁部片
	3	染付磁器・皿		3.8			中国	底部片
	4	染付磁器・皿		6.8			中国	底部片
	5	染付磁器・碗	11.2			内面雷文	中国	口縁部片
	6	染付磁器・小杯		2.6			中国	底部片
	7	染付磁器・皿		14.2		陶胎／松枝文	中国	底部片
	8	染付磁器・蓋	8.8	3.6	2.5	内面四方襷文	肥前	40%
	9	施釉陶器・皿	7.9	3.2	1.8	底部回転糸切り	石見	完形
	10	施釉陶器・皿	8.1	3.9	2.2	灯明皿／底部回転糸切り	石見	完形
	11	施釉陶器・皿		4.4			肥前	底部片
	12	施釉陶器・皿	10.4	4.2	3.2	胎土目積	肥前	20%
	13	施釉陶器・碗		4.6				底部片
	14	施釉陶器・碗		4.4			肥前	底部片
	15	施釉陶器・皿		8.4		胎土目積／鉄絵	肥前	底部片
	16	磁器・香炉	10	3.8	4.6	三足		80%
	17	施釉陶器・壷		10			肥前	底部片
	18	施釉陶器・壷	10.4				肥前	口縁部片
	19	施釉陶器・鉢	30				肥前	口縁部片

皿類は7のみ掲載しているが、口縁部形態の違う皿が数点出土した。また、8・9・10・16といった19世紀以降の遺物は、上層遺構面に伴うものである。表土採集によるものの他に、上層遺構面からも施釉瓦・碍子やガラス製品など近代の遺物が出土している。が、図化可能なものが抽出できなかったため、掲載していない。

1は青磁の口縁部片で、2は小野分類C群の白磁皿。3・4・5はいずれも青花の皿・碗である。5は細い描線と筆の濃淡で図柄を描く。6は高台畳付を除き全面に施釉される。これらが本トレンチ出土遺物中でも古い時期のものになろうか。7は陶胎の皿で、焼成が悪く外面には気泡が多く見られる。8は外面を淡緑色に仕上げて青磁風にしたもので、内面中央にはやや不明瞭な印判装飾が施される。10は口縁部に切り込みを入れていることから灯明皿とみられるが、内面に煤などの付着物は無く、使用痕跡は認められない。11・12はともに16世紀末から17世紀前半にかけての肥前系陶器皿である。12はその残存量と内外面の痕跡から、4箇所で胎土目積がされていたと推測される。13は高台畳付を除き全面に施釉されており、16世紀末から17世紀前半の時期が考えられるであろう。15はどっしりした高台の唐津鉄絵皿である。16は線香立てといった用途が想定されるものであろう。17は外面に釉薬が筋状に垂れている。

第9図には鉄・銅製品や石製品を掲載した。21・22は上層遺構面に伴って、23・24は礫層から出土した。20の頂部は外観より大きく折れ曲がっており、これは使用による変形のためとも考えられる。先端部分は破損しているが、旧状に近いとみられる。21・22はともに和釘である。21の先端部分は破損しているため、本来は22より長かったと推測される。逆に22は先端部分が残っているものの、遺存状況はよろしくない。頂部は長方形である。23は銅製の分銅で、重量は1.32ｇである。1匁を3.75ｇとすると、3分5厘2毛となる。ただし、若干表面が磨耗したことにより、本来の重量から変化しているとも考えられる。24のすり臼は、石見銀山の技術書などでは「要石」と呼ばれている。叩き・磨りによるくぼみは、両面の4箇所にみられる。1箇所の中でも位置をずらしながら使用しており、ある程度繰り返し使用されたことがうかがわれる。

第1トレンチ出土の銭貨は、第10図・表3のとおりである。陶磁器同様16世紀代から近代まで多種あり、ほとんどが上層あるいは下層の礫・整地層から出土した。25から30は、錆などの付着が著しい30を除いて、みないわゆる「新寛永」である。25・26は背面に文字が入れられるもの

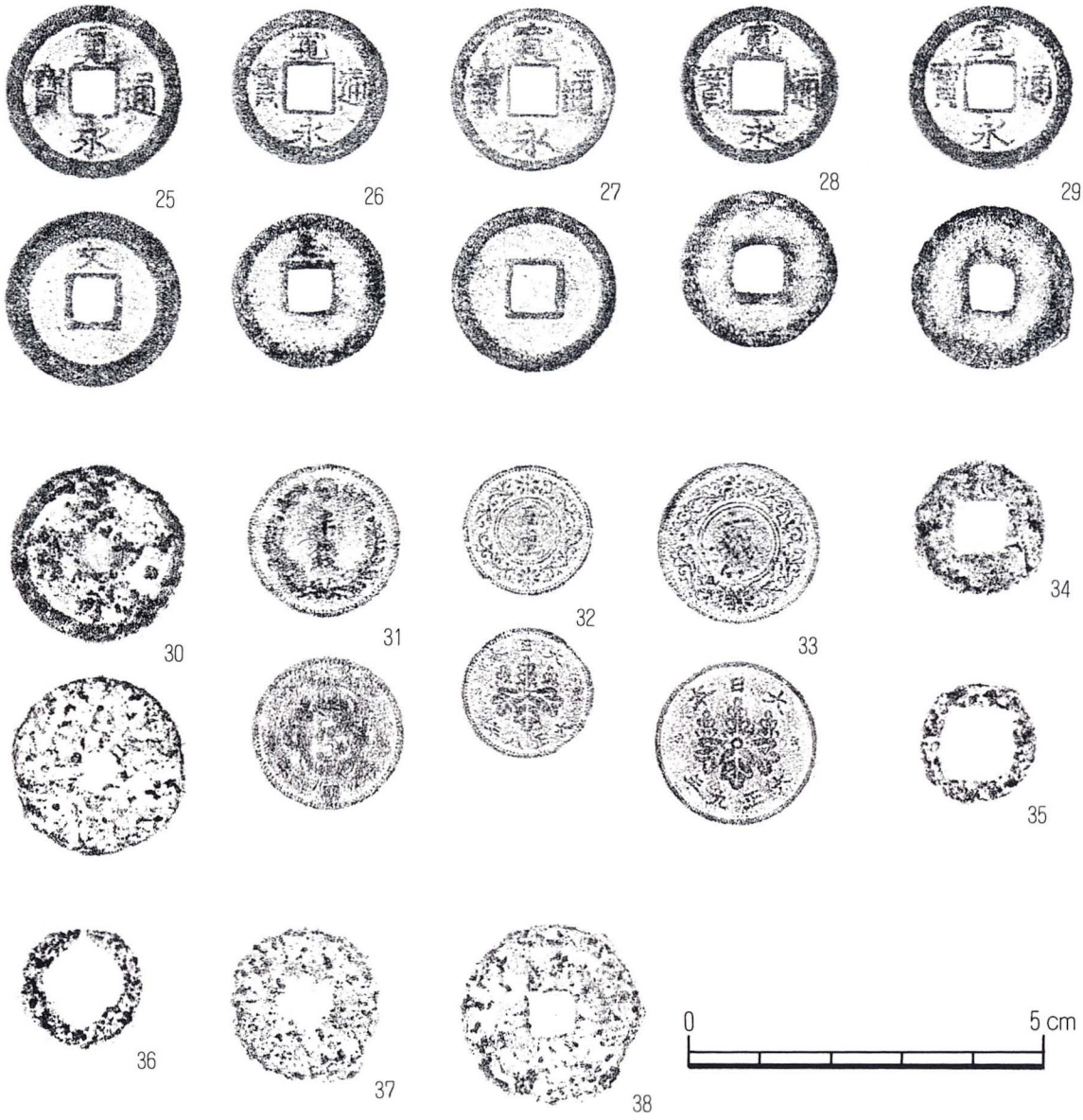


第９図　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ　出土遺物実測図②（金属・石製品）（Ｓ＝1／2・1／1・1／6）

表２　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ　出土遺物観察表②

図面番号	遺物番号	種別・器種	法量（cm）			技法／文様／その他	推定生産地	残存量
			現存長	最大幅	最大厚			
9	20	鉄製楔	10.2	2.6				先端欠損
	21	鉄製和釘	7					先端欠損
	22	鉄製和釘	7.2					先端残存
	23	銅製錘	1.35	0.9		1.32ｇ		ほぼ完形
	24	石臼	25	28.2	7.1	安山岩製／両面使用		部分破損

で、25は寛文８年に江戸亀戸で鋳造された「文銭」である。29の重量は他より軽い数値になっているが、背面が磨耗し扁平になっているためであろう。31から33の近代の銭貨は上層遺構面にかかる層で出土しており、陶磁器などとも時期的に適合する。34から36は無文銭として表３に掲載したが、35・36は内郭が広がって輪状になっており、34より粗悪なものである。これらは下層の礫・整地層から出土した。石見銀山遺跡の調査では、無文銭は石銀千畳敷地区・石銀藤田地区や下河原吹屋跡で出土している。



第10図　栃畑谷Ⅰ区１Ｔ　出土銭貨拓影（Ｓ＝1／1）

表３　栃畑谷Ⅱ区　出土銭貨観察表

図面番号	拓影番号	出土地点	種別	初鋳年	法量（cm）			備考
					最小・最大直径（cm）	厚さ（cm）	重量(kg)	
10	25	包含層	新寛永	1666	2．50	0．10～0．12	3．19	背面「文」字
	26	東西調査区　壁　精査	新寛永	近　世	2．20：2．21	0．08～0．10	2．27	背面「足」字
	27	褐色土（上層）	新寛永	〃	2．33：2．34	0．10～0．11	2．32	
	28	褐色土（整地層）	新寛永	〃	2．22：2．25	0．10～0．11	2．24	
	29	包含層	新寛永	〃	2．30：2．32	0．07～0．10	1．65	
	30	拡張区(西)ズリ・カラミ整地層	寛　永	〃	2．49：2．52	0．12～0．21	3．18	
	31	表土	半　銭	明治19	2．18	0．10～0．11	3．25	
	32	褐色土（上層）	五　厘	大正８	1．86：1．87	0．09～0．11	1．83	
	33	整地層	一　銭	大正９	2．30	0．11～0．13	3．58	
	34	拡張区(西)ズリ・カラミ整地層	無文銭	中　世	1．88：1．92	0．06～0．11	0．98	
	35	ズリ整地層	無文銭	〃	1．69：1．72	0．06～0．11	0．42	
	36	整地層（北半）	無文銭	〃	1．71：1．75	0．08～0．11	0．47	
	37	南半　ズリ・カラミ整地層	不　明	不　明	2．15：2．25	0．13～0．20	2．02	
	38	整地層	不　明	〃	2．56：2．60	0．14～0．28	4．55	

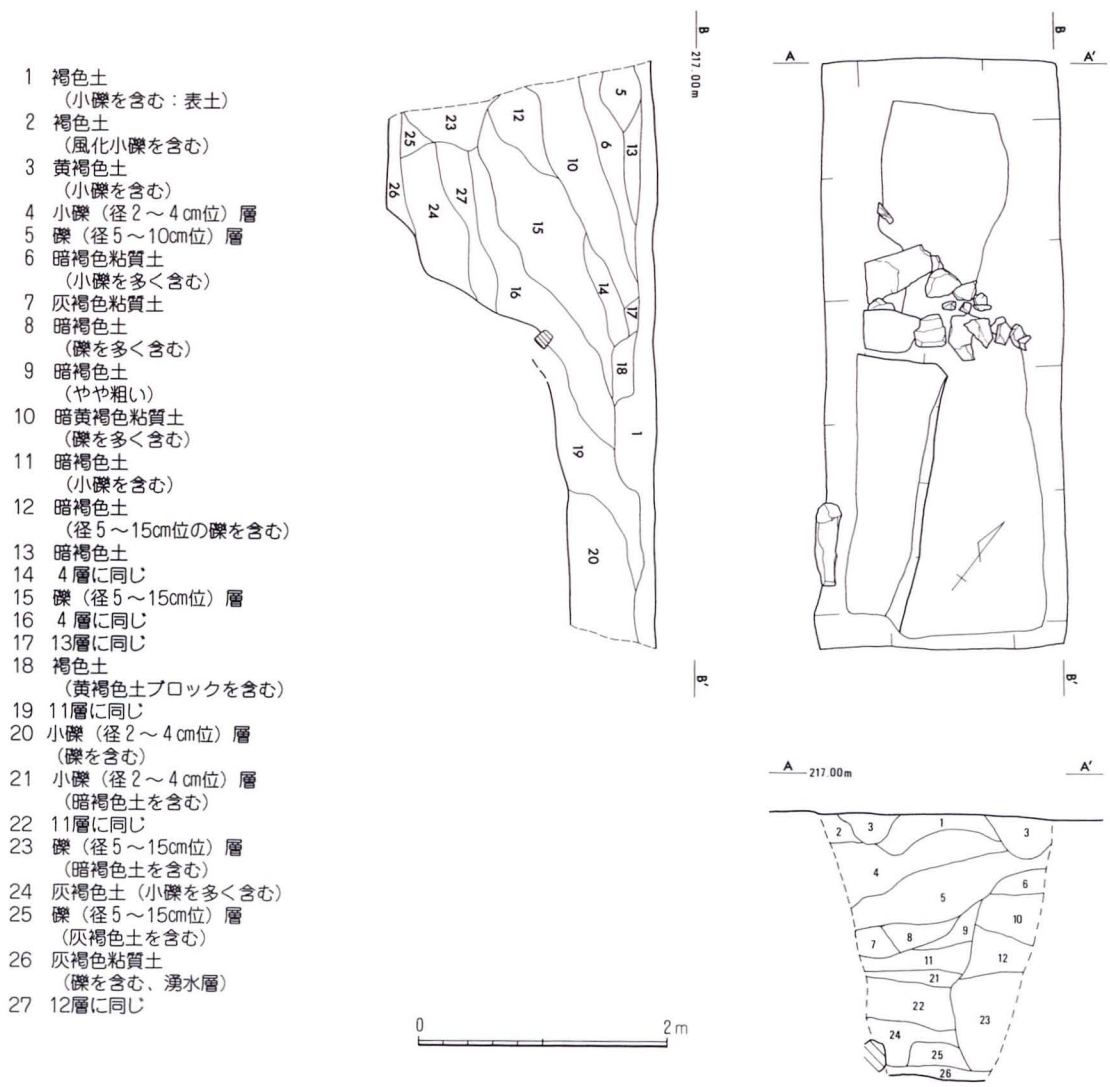
(2) 第２トレンチ

第２トレンチ（第11図）は第１トレンチの北東約２ｍに位置し、長辺６ｍ、短辺２ｍの長方形トレンチである。調査前は第１トレンチ同様、杉の間の平坦な地表に雑草が生い茂っていた。

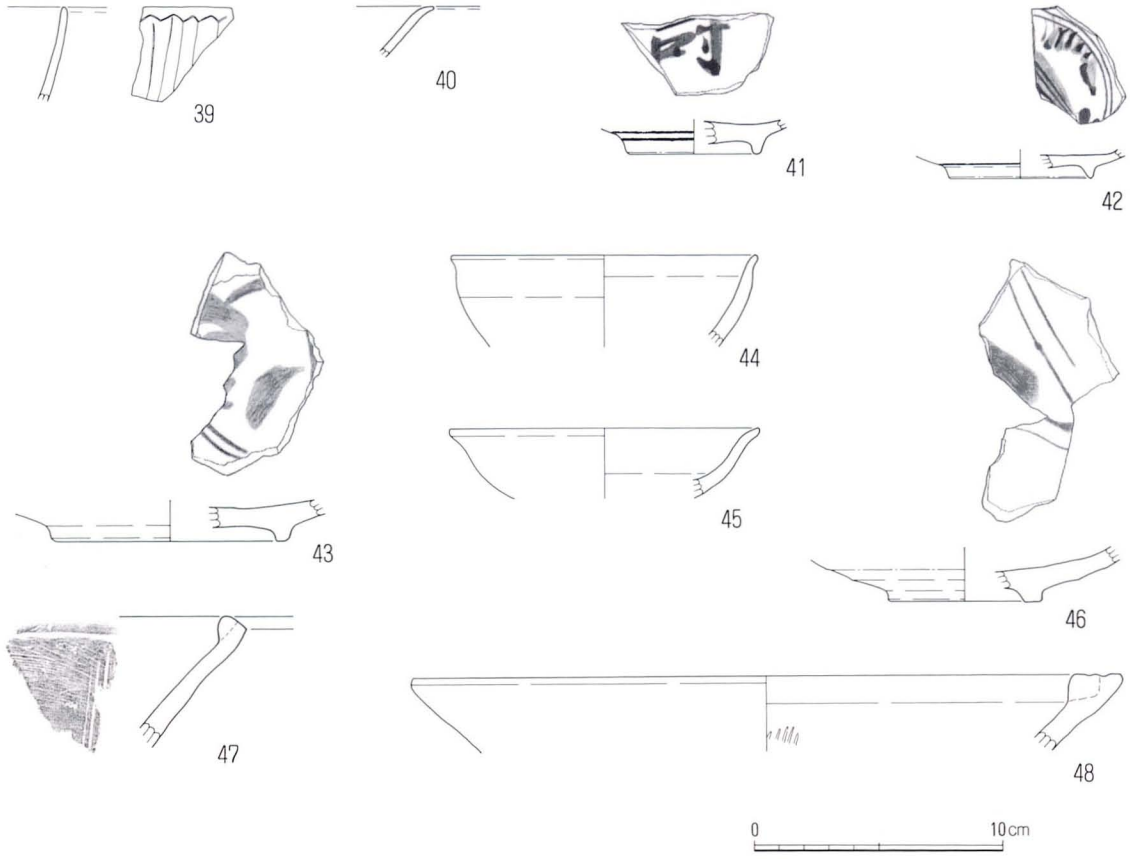
調査を開始して、まず近代以降の廃棄土坑をトレンチ南側角の部分に確認した。この土坑には、瓦・陶磁器やガラス製品など近代の遺物が多く含まれた。しかし、第１トレンチで確認されたような黄色系の粘土を貼った遺構面ははっきりと確認できず、近代の様相は明らかでない。

掘り下げていくにつれ、褐色土層に礫が多く混じるようになった。さらに下層では、礫が大量に含まれる層が何層にも重なっていた。土層断面からは、礫層・礫混じり層がトレンチ南東側から北西側へ向け傾斜して堆積している状況が観察された。礫は径２～４㎝程度の小礫と、５～15㎝程度の礫と大別して２種類ある。各層にみられる礫の大きさはほぼそろっているが、小礫層と礫層の堆積に水性堆積のような明確な順序はみてとれない。おそらくは整地を目的として、人為的に選別された大小の礫が何度かにわたって搬入されたものと思われる。

地表面から30～40㎝程度掘削したところで、トレンチ東側四分の一程の範囲に固く締まった平坦面を確認した。この面は北西方向へ向けて伸び、トレンチ中ほどに土留め状に並べられた礫の手前で緩やかに傾斜している。礫の北側は斜面となって急激に落ち込んでいた。この上段平坦面の西側は40～50㎝下で同様の平坦面となっ



第11図　栃畑谷工区２Ｔ　平面・土層図（Ｓ＝1／60）



第12図　栃畑谷Ⅰ区２Ｔ　出土遺物実測図（陶磁器・土器）（Ｓ＝1／3）

表４　栃畑谷Ⅰ区２Ｔ　出土遺物観察表

図面番号	遺物番号	種別・器種	法量（cm）			技法／文様／その他	推定生産地	残存量
			口径	底径	器高			
12	39	青磁・碗				鎬蓮弁文（先端不明瞭）	中国	口縁部片
	40	白磁					中国	口縁部片
	41	染付磁器・皿		5.2		陶胎／見込「壽」字	中国	底部片
	42	染付磁器・皿		5.6		陶胎	中国	底部片
	43	染付磁器・皿		9.2		陶胎	中国	底部片
	44	施釉陶器・碗	12.2			鉄釉	瀬戸美濃	口縁部片
	45	施釉陶器・皿	12.4			全体に被熱	肥前	口縁部片
	46	施釉陶器・皿		6			肥前	底部片
	47	瓦質土器・擂鉢				内面ヨコハケのち擂目		口縁部片
	48	土師質土器・	28.6					口縁部片

て、トレンチ中ほどで北側へ向け傾斜している。上下二段の平坦面の位置関係から、下段の平坦面を通行する通路状遺構と想定することも可能である。しかし、上段平坦面に対応する面は確認できず、通路の幅は不明であった。

本トレンチ北側部分では、地表面から2.5m下の26層（湧水層）まで掘削した。この層以下を無遺物層と判断し、掘り下げをやめている。

【第２トレンチ出土遺物】（第12図）遺物の大半が礫層から出土している。39は小野分類Ｃ群に属するもの。44は瀬戸・美濃大窯のものであろう。46は17世紀前期の唐津鉄絵皿である。47については、上市場地区最下層で同様に瓦質擂鉢底部片が出土しており、16世紀末以前のものである可能性が指摘されている。他に備前系陶器甕片などが出土しているが、肥前系磁器はみられなかった。主な遺物の時期は、16世紀末から17世紀前葉にかけてと考えられる。

第３節　Ⅱ区の調査

(1)　第１遺構面

Ⅱ区は、東を山神川に接する約500㎡の平坦地に設定した調査区である。調査区南西方向には近代の建物跡の基礎と考えられる石積み区画が残存していた。また西側は標高差約50ｍの尾根が迫り、その斜面には幅１ｍ以上で方形の入り口を持つ坑道が開口している。斜面のすそには径５～６ｍの池がある。調査前は平坦地全体に竹が密集して生えており、その中に杉がわずかに混じっているという状況であった。竹を伐採した時点でＳＢ０１の礎石列などは一部地表に表面を露出させており、建物跡の存在が予想された。

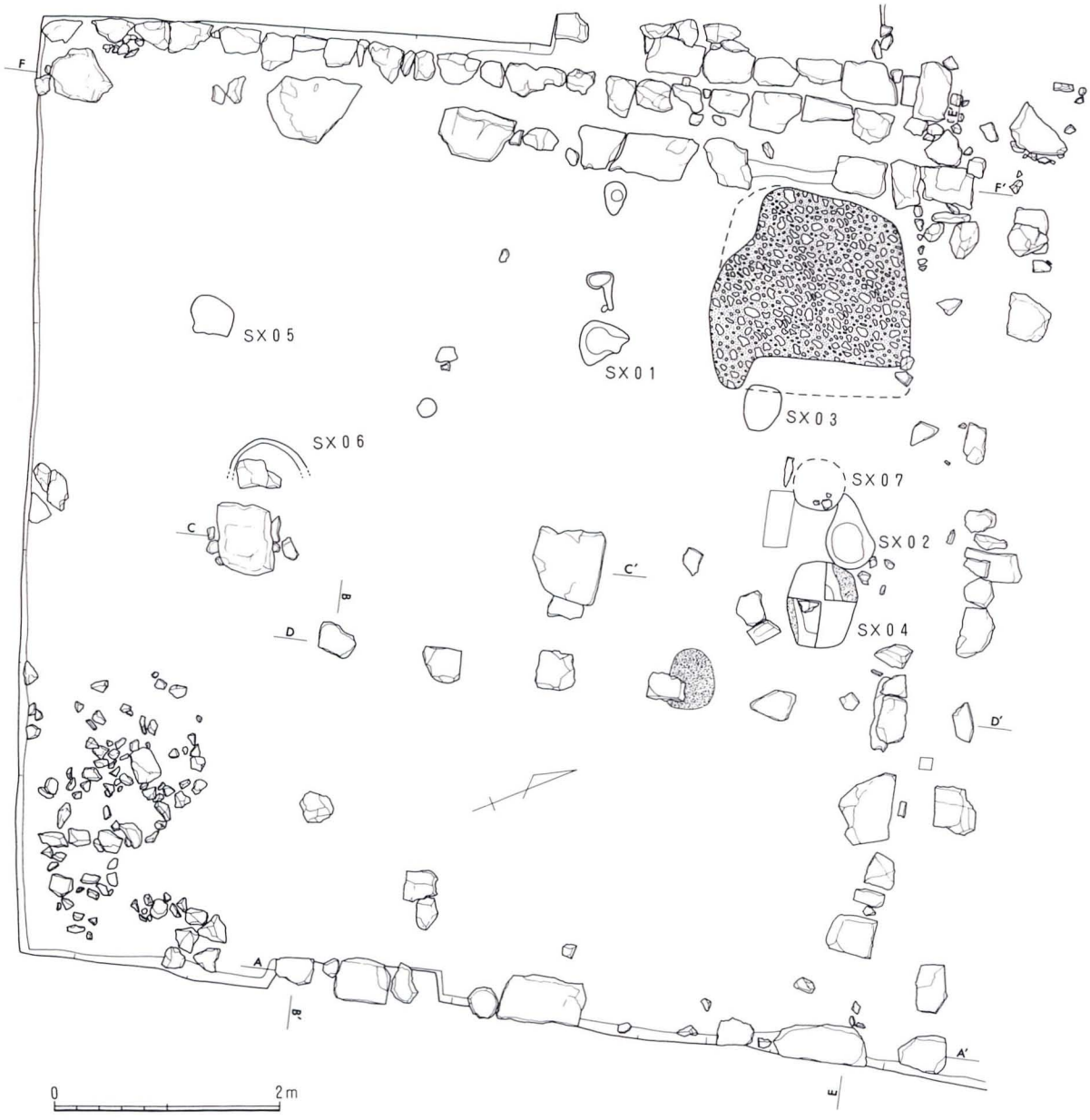
第１遺構面は、地表から約15～30cmの厚さで堆積している暗褐色土を除去した段階で検出された。第１遺構面の基盤層である褐色土層は、礎石建物跡周辺で固く締まっている。調査区北西部分では、暗褐色土の下で暗黄色の岩盤が検出された。

第13図　栃畑谷Ⅱ区　全体平面図（Ｓ＝1／100）

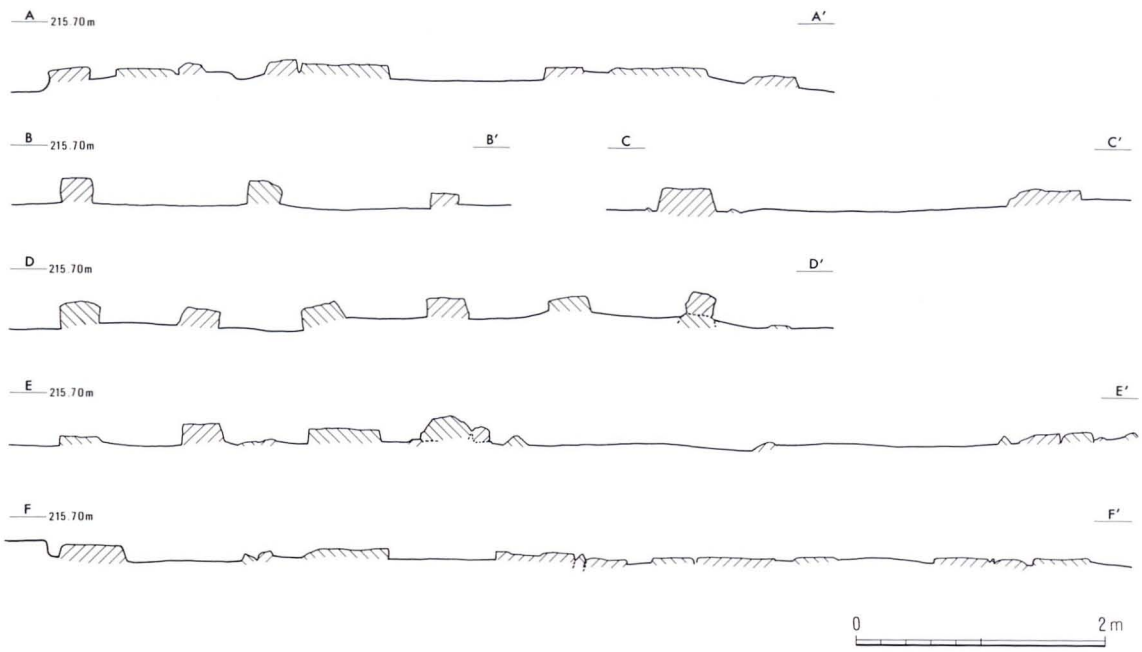
第１遺構面では、礎石建物跡２棟・製錬関連遺構15基・溝状遺構３条・土坑９基・ピットが検出された。調査区東側の山神川に面してＳＢ０１・０２が並んで位置しており、建物内部に製錬関連遺構をはじめとして遺構が集中している。ＳＢ０１・０２の西側にはＳＤ０３が南西方向から屈曲しつつ北東方向へ伸びている。ＳＤ０３をはさんでＳＢ０１西側では、黄色粘土面や礎石・ピットが検出されている。調査区北西部分で検出された暗黄色の岩盤部分では、溝状遺構やピットを検出している。出土遺物から推定される時期は、明治時代半ば以降である。

【ＳＢ０１】（第14・15図）ＳＢ０１は新旧２時期の礎石建物跡で、古い時期の建物では北側0.7mにＳＢ０２が、西側0.5mにＳＤ０３が位置する。

Ａ（一部）・Ｂ・Ｄラインの礎石は、南北５ｍ・東西３ｍの範囲に南北１ｍ・東西1.5m間隔で並び、第１遺構面基盤層にすえられた状態であった。これらは、Ａ（一部）・Ｃ・Ｆラインのそれに比較して小さい点・礎石上面のレベルが高い点・礎石同士の間隔が均一な点などから、一つのまとまりとしてとらえることができよう。この礎石列のうち西側の１基は建物跡整



第14図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＢ０１平面図（Ｓ＝1／60）



第15図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＢ０１断面図（Ｓ＝1／60）

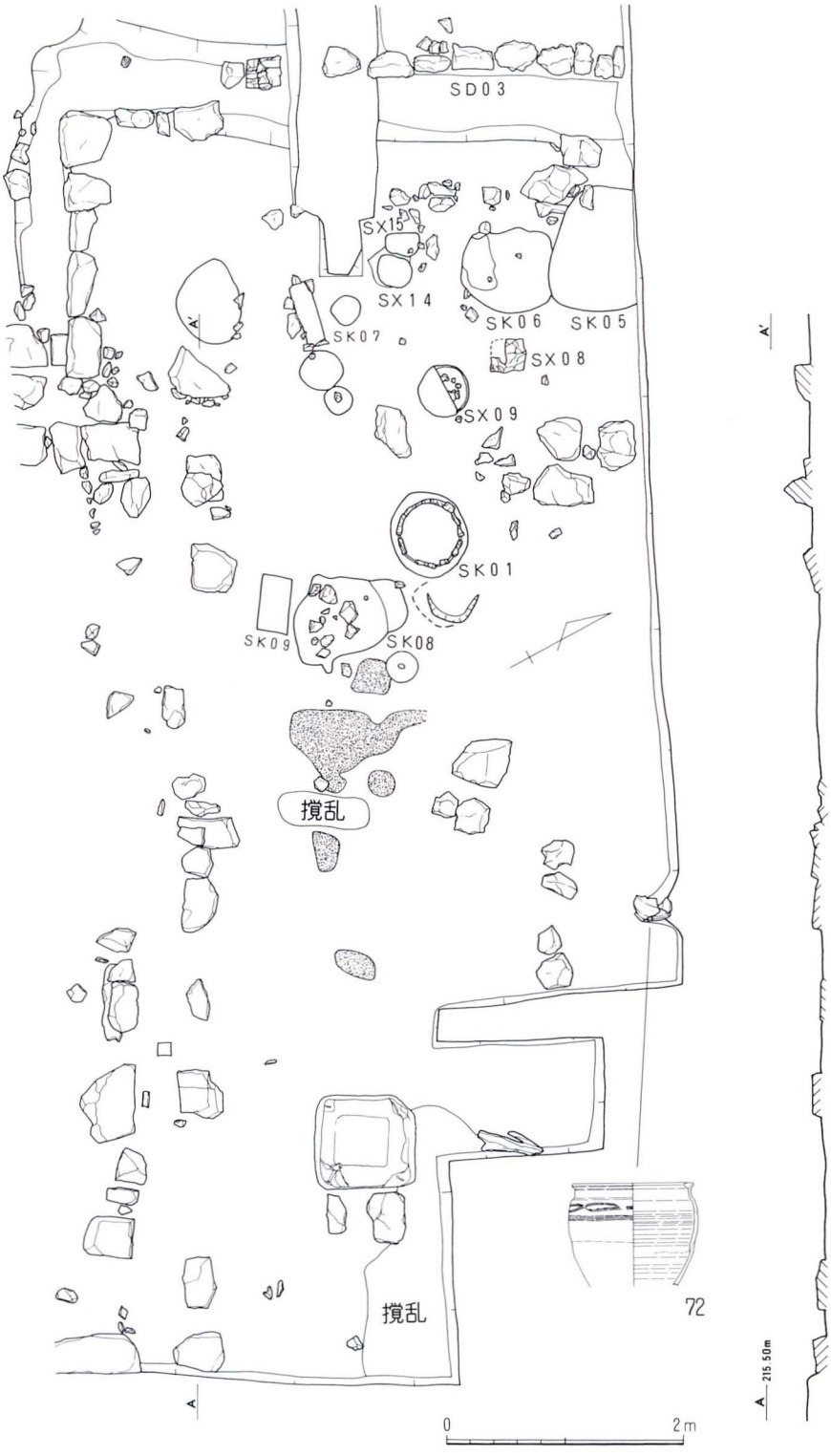
地面の被熱部分の上に乗っている。礎石上面のレベルがより高い点と考えあわせると、Ａ（一部）・Ｂ・Ｄラインによる礎石建物跡は、Ａ（一部）・Ｃ・Ｆラインで構成される礎石建物跡より新しい時期の別建物跡と思われる。Ａラインでは礎石列が重複しているが、礎石の大小・並び方からすると、古い時期の建物跡の礎石を再利用しているようである。しかし、調査時には建物床面とおぼしき面を確認できず、また礎石列内側に遺構を確認できなかった。遺構に明確にともなう遺物は無いため正確な時期は不明であるが、近代以降の遺構と考えられる。

ＳＢ０１の古い時期のものは、Ａ（一部）・Ｃ・Ｆラインの礎石列で構成される。礎石同士の間隔は、若干のばらつきはあるものの1.5ｍないし２ｍを単位としている。推定される建物の規模は、南北約８ｍ、東西約7.8ｍのほぼ正方形プランになる。西側の礎石列から推測すると、調査区南側へ礎石列がさらに伸びる可能性も否定できない。なお建物跡の南角部分では、廃棄・整地目的の土坑が下層に存在したためか、礎石を確認できなかった。礎石には長さが60～80cmになる大きな石を使用しているのが特徴で、建物跡中央にも南北方向の礎石列がある。Ｃラインのうち南側の礎石やＦライン状のそれと対応するものには、７寸角の柱痕跡が残っていた。地元大森・銀山の町なみでは、これほど大きな柱を使用する建物は稀である。

【ＳＢ０１内遺構】ＳＢ０１内で検出された遺構にはＳＸ０１～０７・ピットがある。遺構の多くが建物跡北西部分に集中する感がある。西側ＳＸ０１からＳＸ０６にかけての範囲は、部分的に還元状態に至るまで被熱した範囲が広くみられ、これらの遺構は被熱範囲となにか関係があると考えられた。ＳＸ０５は黒色炭化物層を埋土とする製錬遺構の下部構造と思われるものである。ＳＸ０２・０７などは半ば壊された状態であり、ＳＸ０４も礫が混じる単一の埋土から一括して埋められたと判断された。遺存状

写真３　栃畑谷Ⅱ区　SB01調査風景（西から）

況がいいとは言い難いが、いずれの遺構も被熱箇所があり、製錬作業との関連が推測される。建物北東角には、細かい製錬滓が厚さ約10cmで集中する部分が存在した。調査時の不手際により一部誤って掘削したが、本来はほぼ方形の範囲に存在したとみられる。これに接する西側礎石列の一部分には、礎石と礎石の間に長さ80cm、幅15cmの木質が残っていた。これを製錬滓集中部分と関連付けるならば、木質は建物壁がない戸口の部分にあたり、製錬滓集中部分はタタキと推測される。礎石建物のこの付近に出入り口があった可能性を指摘しておきたい。



第16図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＢ０２平面・断面図（Ｓ＝1／60）

【ＳＢ０２】（第16図）ＳＢ０２はＳＢ０１と同じく礎石立ちと考えられ、南側0.7ｍにＳＢ０１が、西側にＳＤ０３が位置する。ＳＤ０３はＳＢ０１の西側を北へ伸び、北辺で西へ折れて2.5ｍのところで再び北へ屈曲している。ＳＤ０３の配置によって建物敷地が変化していることから、ＳＢ０２の規模を推定した。建物南辺にあたる礎石列は長さ約８ｍ、礎石間隔はおよそ２ｍである。ＳＤ０３や他の遺構との位置関係からすると、建物の南北方向の長さは9.5ｍから10ｍ程度と考えられる。調査では一部分を確認したのみであり、建物は調査区の北側へさらに広がっていることが推測される。また、ＳＢ０２のほぼ全体で黄灰色粘質土が床面の土として検出された。黄灰色粘質土の面はＳＫ０８周辺で顕著に被熱していた。出土遺物から、時期は明治時代半ば以降と推測される。

【ＳＢ０２内遺構】ＳＢ０２西側では、東側と比較して多くの遺構を確認した。製錬関連遺構にはＳＸ０８・０９・１４・１５が、ほかに土坑ＳＫ０１・０５～０９がある。またＳＫ０８東隣で、遺構面に埋め込まれた臼を確認した。

ＳＸ０８は凝灰岩系の30cm四方に復原される石を中心とした遺構で、石周辺は被熱し、石の内側のくぼみにはわずかに炭化物混じりの土が残っていることが確かめられた。ＳＸ０９はＳＸ０８の南50cmに位置し、平面形は径約0.5ｍの円形である。礫敷きの下部構造直上には製錬滓を含む土が堆積していた。ＳＸ１４は長軸30cm短軸26cmの平面楕円形の遺構で、深さは15cmである。埋土は黒色炭化物層で、周辺は帯状に被熱していた。近接するＳＸ１５はほぼ同規模であるが、深さ数cmと浅い。これら製錬関連遺構の遺存状況は悪く、炉としての用途を推測するまでには至らなかった。

土坑のうち特徴的なのはＳＫ０１である。直径約0.8ｍ深さ約0.6ｍのほぼ正円形の掘り方の内側に、長さ20～30cm程度の板が鉄製の留め具で固定されて残存していた。掘り方底に板は残存していなかった。埋土は上層の暗褐色土で、竹根が多量に入り込んでいた。本遺構は、掘り方内に木製の桶を据えたものと考えられる。用途として便槽が想起されるが、近くに同規模の土坑がないことから、その場合単体での使用が考えられる。ただ周辺には製錬関連遺構が多数あるため、ＳＫ０１も製錬作業に関係する施設として理解したい。ＳＫ０８は長軸約0.8ｍの楕円形の土坑である。黒色炭化物層から多量の製錬滓が出土し、炉の可能性も考えられる。

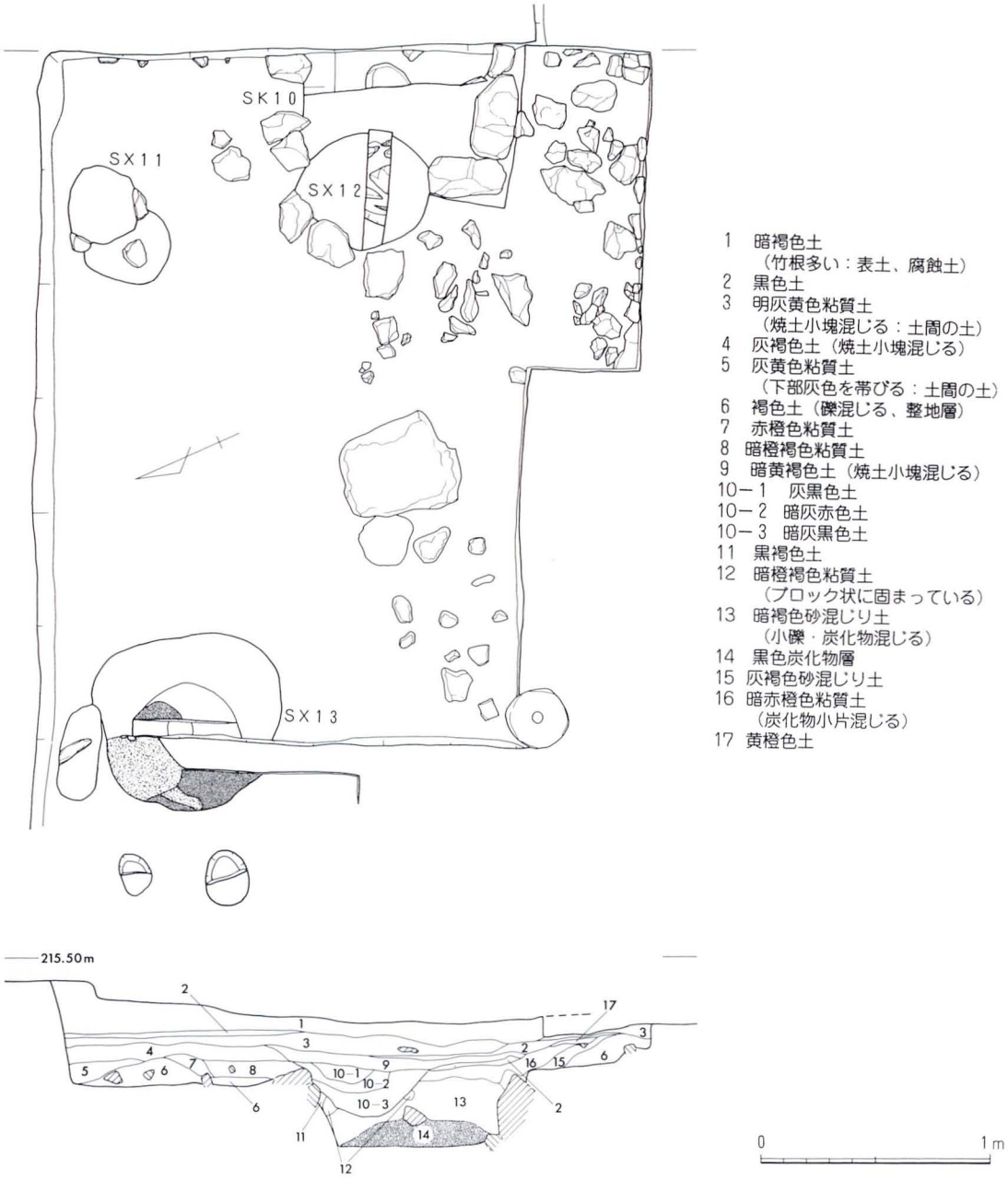
山神川寄りの東側では遺構は確認されなかったが、ほぼ正方形の台座状の石を１基確認した。この石は、断面が台形で一辺は約80～85cm。遺構面に埋め込まれているため現状での高さは約15cmである。四隅は５cmほどの厚みで石を割りとっており、そこへ鉄棒を打ち込んでいる。鉄棒本来の長さは不明だが、石の外側に約10cm残っている部分は錆による腐蝕もあまり進行していなかった。石表面には加工痕が認められ、上部の平らな面には40cm四方の圧痕が残る。石の周辺から性格を決定するような遺物は出土していない。何らかの機械・物品を設置することを目的とした石と考えられる。

写真４　栃畑谷Ⅱ区　ＳＸ14・15（北から）

写真５　栃畑谷Ⅱ区　ＳＫ０８（東から）

【ＳＢ０２下層】ＳＢ０２の東側部分では遺構がほとんど確認されなかった。そこで第１遺構面の下層を調査し近世以前の様相を探るため、第17図のように５×６ｍの範囲で面的に掘り下げた。その結果第１遺構面の約20㎝下に、より古い遺構面が存在することが明らかになった。第１遺構面から下層の遺構面までには焼土や礫混じりの土がみられ、整地がなされたことをうかがわせる。この面は固く締まる灰黄色粘質土を基盤層とし、製錬関連遺構周辺などでよく被熱していた。南側張出部分には礫が多くみられた。掘り下げた範囲の中央付近に約50㎝四方の平坦な石が認められたが、他に建物の礎石になるような石はみあたらなかった。柱穴なども確認できず、建物構造などは不明である。また下層遺構面までの層や確認された遺構から、時期の明確な遺物は出土しなかった。第１遺構面の時期が明治時代半ば以降である点や整地とみられる層厚を考慮して、下層遺構面は近世末期から近代初頭の時期を考えておきたい。

【ＳＢ０２下層遺構】下層遺構面で確認された遺構には、ＳＸ１１・１２・１３・１６、ＳＫ



第17図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＢ０２下層平面・土層図（Ｓ＝1／30）

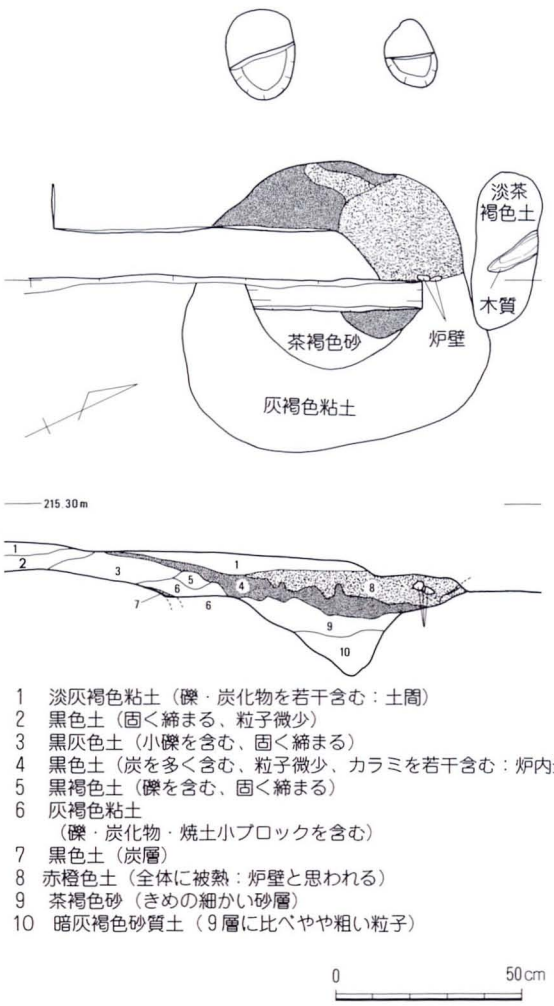
１０がある。ＳＸ１１は直径約70cm、やや六角形に近い平面形の遺構である。ＳＸ１２は直径約50～60cm、やや楕円に近い形の遺構である。浅い皿状の掘り方内に灰褐色土・暗灰褐色土が堆積していた。切り合い関係からＳＫ１０より新しい。北から西側に人頭大の礫がある。

ＳＸ１３（第18図）は直径約80cmのほぼ円形のプランをもつ遺構で、下層遺構の中では炉跡と考えられるものである。遺構は検出面で赤橙色土（８層）と黒色土（４層）、灰褐色粘土（６層）が円形に広がり、断面の土層観察では、上から赤橙色土、黒色土、灰褐色土の層序となっている。赤橙色土は小礫を含む被熱した固く締まる土層で、金属分が付着した炉壁片を２点含んでいることから、炉壁材となり炉壁が倒れた状態であると観察された。黒色土は炭を多く含み、カラミを若干包含する緻密な土層でこれは、炉内土層が遺存したもの、小礫・炭化物・焼土小ブロックを含む灰褐色粘土が炉本体を構築している基盤層になると観察された。この灰褐色粘土の下層には炭層である黒色土（７層）が帯状に入り、炭灰の可能性がある。

ＳＸ１３の構造を復元するならば、作業面をすり鉢状に窪め、炭層を貼り、灰褐色粘質土で炉底と炉壁を構築する。炉内の土層は下部構造として極めの細かい茶褐色砂層と暗灰褐色砂質土層を入れ、その上に黒色土を置いている。精錬は、この黒色土の上面でおこなわれたと推測され、操業後あるいは上層に新たな施設が構築される際に廃棄、破壊されたものとみることができる。

下層遺構面の年代が、近世末から近代初頭であると考えられることから、当時の精錬施設は近世の技術によって構築されたものか、基本的には近世の技術に一部西洋技術を取り入れて構築されると考えられている。炉の下部構造に着目すれば、地床構造であることなどから基本的には近世の技術によって構築されたものと考えておきたい。

ＳＸ１６は調査区東側の土層断面を観察した



第18図　栃畑谷Ⅱ区　ＳＸ１３平面・土層図（Ｓ＝1／20）

結果確認した。第17図10－１・２・３層にあたり、ＳＫ１０の埋土に掘り込まれている。深さは約20cmで、断面はレンズ状である。10－２層は被熱のためであろうか、やや赤みを帯びる色調の層であった。ＳＫ１０は調査範囲の西側に位置し、ＳＸ１２・１６に切られていることから、より古い遺構とみられる。下層遺構面検出時には大半が暗褐色砂混じり土（13層）で覆われる状態であった。南北約１ｍ、東西70cm以上の規模で、深さは約40cmである。南北両辺の肩に礫を配置しており、西側のＳＸ１２の断ち割り下層でも礫が存在することを確認した。が、底面に礫は認められなかった。石銀千畳敷・石銀藤田地区で同様の土坑が調査され、貯水が用途の一つとして指摘されている。

写真６　栃畑谷Ⅱ区　ＳＤ０３（北から）

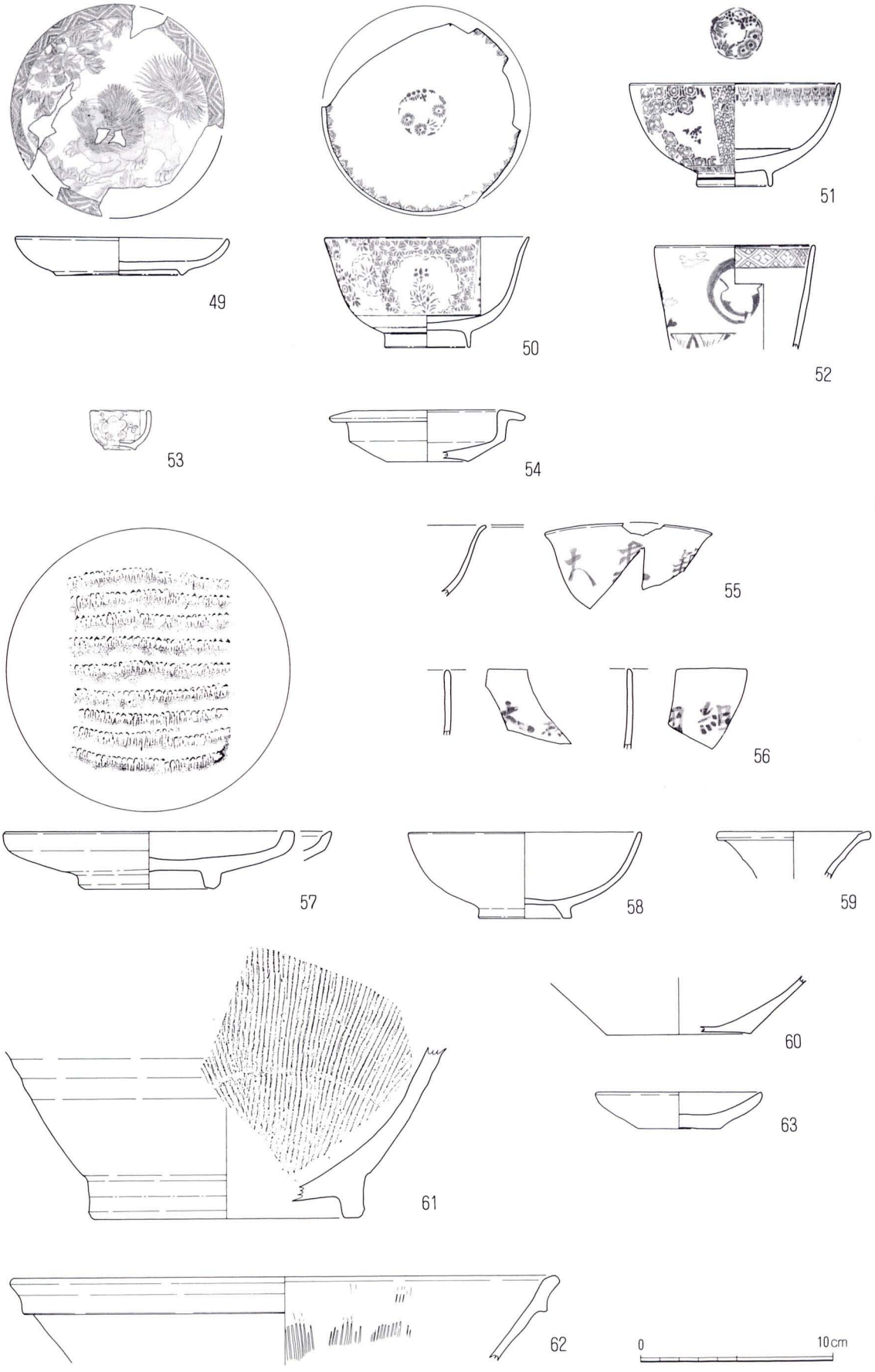
写真７　栃畑谷Ⅱ区　西側下層状況（北から）

【ＳＤ０３】以上の礎石建物跡２棟に関係する遺構がＳＤ０３である。ＳＢ０１・０２の西側に位置し、底面の標高差から南から北へ向けて流れていたと考えられる。西側の尾根からの水を遮断することを目的とするものであろう。底面および掘り方の肩部分に石を多く用いている点が特徴的である。底面に石が敷かれた部分はＳＢ０１北西部分から始まり、ＳＢ０２に接する角部分まで約2.5ｍの長さで残っていた。敷石は40～50㎝程度の大きさで、上面が平坦なものが使用されており、整った印象を受ける。ＳＤ０３が屈曲する角部分から調査区北壁までの部分では、底面の敷石はみられず掘り方の肩部分に礫が並べられていた。ＳＤ０３が西へ向かう部分では、ＳＢ０２側の肩に高さ30～40㎝で礫が並ぶ。礫の間や裏側も他の部分より固く締まっており、ＳＢ０２の製錬関連遺構が集中する部分を北東に控えて、防湿目的で入念に造作をしたと考えられる。ＳＤ０３西側肩では、土層観察用の畦より北側に礫がまとまって残っていた。礫が残っていなかった部分でも、ＳＤ０３へ半ば落ち込んだかっこうの礫があることから、本来は礫が並べられていたものと考えられる。調査区外の地表面を観察すると、わずかにくぼんだ箇所がＳＤ０３の延長線上を北東方向へ続いていた。ＳＢ０２の西辺に合わせて、ＳＤ０３も伸びているものと推測される。

【Ⅱ区周辺部状況】ＳＢ０１北西では、建物内によくみられる黄色粘土面や礎石・ピットが確認された。長軸2.1ｍ、短軸1.5ｍの楕円形状に残る黄色粘土面の周辺には礎石やピットが位置しており、なんらかの施設が存在した可能性も考えられた。しかし礎石・ピットは整った配置を成すものではなく、上部構築物の様相を把握するまでには至らなかった。また同じ黄色粘土面の南側には、北東と北西にそれぞれ1.1ｍと1.7ｍの長さで「Ｌ」字状に黒色土部分が認められた。ＳＤ０３と基軸方向がほぼ一致することから同時期の遺構と考えてよいと思われる。この付近では、直径10㎝に満たない太さの杭が数本地面にささった状態で確認された。

調査区西側、前述の粘土面南側部分では、ＳＢ０１・０２やＳＤ０３と同レベルでは遺構が確認できなかった。そこで下層の状況確認を目的として４×３ｍの範囲を掘り下げた。最終的に地表面から1.5ｍ下まで掘削したが、西側斜面裾の池による湧水のためそれ以上は掘り下げなかった。層序は、地表面下約0.7ｍまでは整地層が互層状に堆積しており、さらにその下ではわずかに炭化物を含む灰色系粘質土が堆積し、岩盤直上の明黄色粘土となっている。整地層中からは遺物が出土しているが、灰色系粘質土からは出土しなかった。底近くでは、岩盤が南へ落ち込んでいるのが確認された。この範囲内で、近代の廃棄土坑と考えられるＳＫ０４を確認した。ＳＫ０４は第１遺構面の基盤層（褐色土）の下から掘り込まれており、推定規模は直径1.6ｍ以上、深さ1.3ｍ以上になる。

ＳＢ０２西側で確認された暗黄色の岩盤には、溝状遺構やピットが確認された。遺構にともなう出土遺物はない。岩盤はＳＤ０３の手前で南へ落ち込んでいるようである。



第19図　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物実測図①（陶磁器・土器）（S＝1／3）

表5　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物観察表①

図面番号	遺物番号	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	技法／文様／その他	推定生産地	残存量
19	49	染付磁器・皿	11	6.6	2.1			85%
	50	染付磁器・碗	10.6	4.4	5.8			70%
	51	染付磁器・碗	10.8	3.8	5.4	見込松竹梅文		35%
	52	染付磁器・碗	8.2					口縁部片
	53	施釉陶器・小杯	3	1.6	2.1	梅花文		完形
	54	施釉陶器・蓋	7.6	4.2	2.7	外面露胎		30%
	55	施釉陶器・碗				字句染付あり	石見	口縁部片
	56	施釉陶器・碗				字句染付あり	石見	口縁部片
	57	施釉陶器・皿	14.9	6.7	3	卸目9列	石見	90%
	58	施釉陶器・碗	12	4.7	4.5		石見	40%
	59	施釉陶器	7.8				肥前	口縁部片
	60	施釉陶器		7.5		内外面共無釉	石見	底部片
	61	施釉陶器・擂鉢		13.8		1単位12～13条の擂目		底部片
	62	施釉陶器・擂鉢	28.2			1単位11～12条の擂目	肥前	口縁部片
	63	土師質土器皿	8.5	4.2	1.9	底部内面・口縁部に煤付着		30%

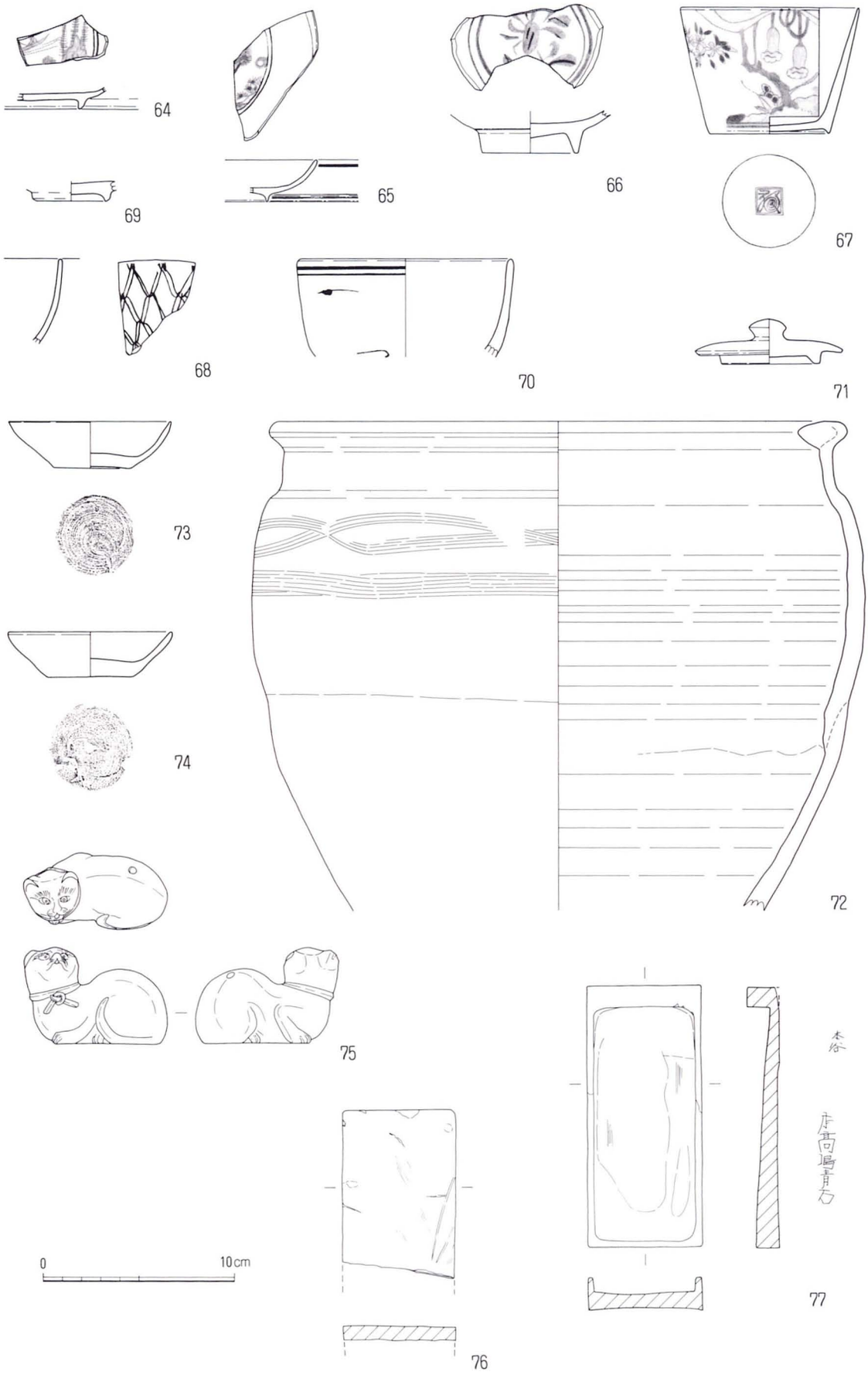
表6　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物観察表②

図面番号	遺物番号	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	技法／文様／その他	推定生産地	残存量
20	64	染付磁器・皿				見込山水図文	中国	底部片
	65	染付磁器・皿			2.2	見込松枝文	中国	15%
	66	染付磁器・碗		5		陶胎／見込花文	中国	底部片
	67	染付磁器・碗	9.3	6.2	6.6	底裏「福」字銘	肥前	70%
	68	染付磁器・碗				外面二重網目文	肥前	口縁部片
	69	施釉陶器・皿		3.6		内面施釉	瀬戸美濃	底部片
	70	施釉陶器・碗	11				肥前	口縁部片
	71	施釉陶器・蓋	7.8	5.1	2.4			ほぼ完形
	72	施釉陶器・甕	29.4				温泉津	40%
	73	土師質土器・皿	8.5	3.9	2.5			完形
	74	土師質土器・皿	8.5	4.4	2.4			35%

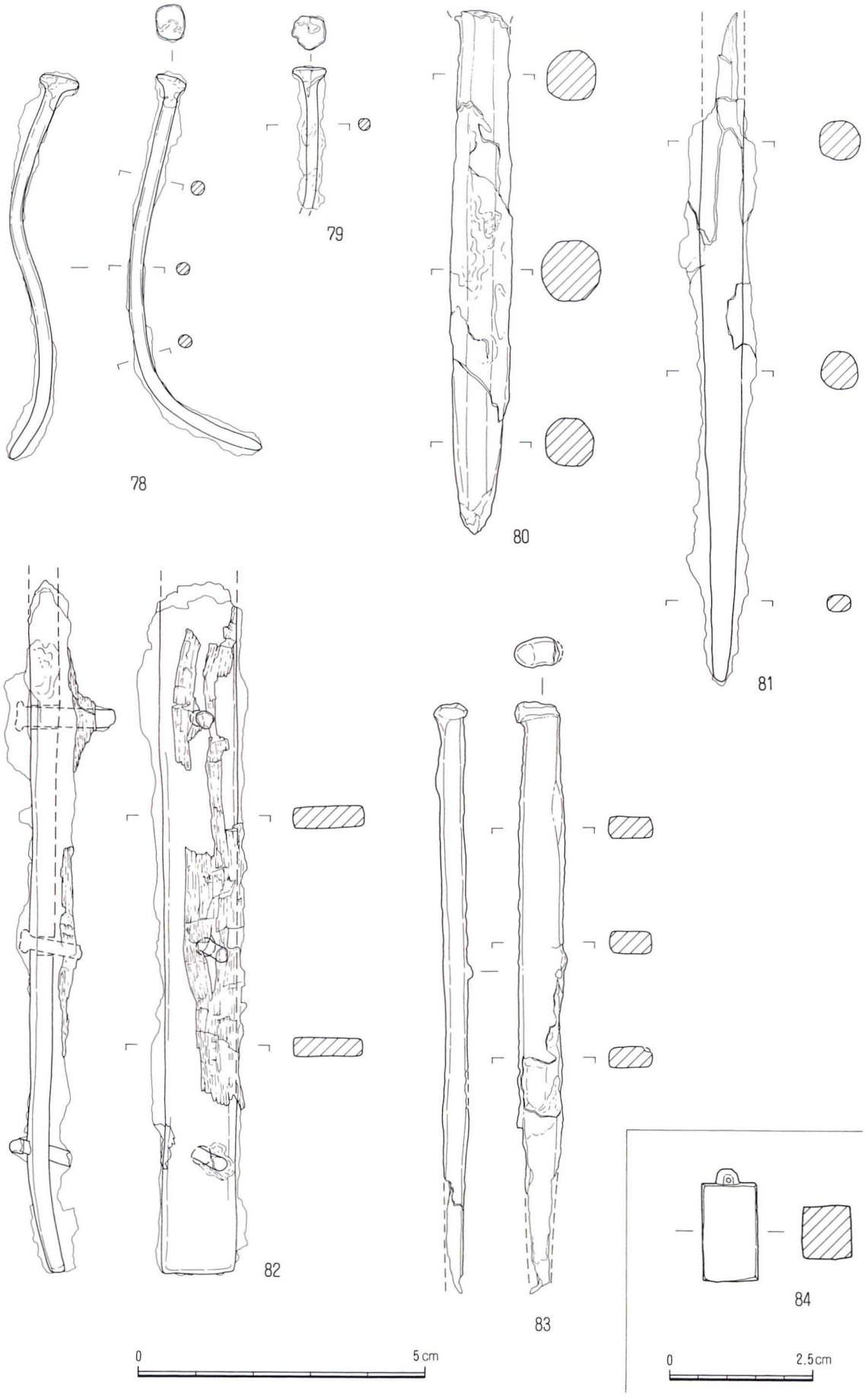
【第1遺構面出土遺物】第1遺構面の調査時には、近代を主とした陶磁器・土師質土器皿のほか、石製品などが出土した。また、建物や製錬作業に使われたとみられる金属製品・土製品もある。出土銭貨は第23図・表9にまとめた。出土遺物の多くは遺構面上の包含層からのもので、ＳＢ０１からのものが多数を占める。調査区西側下層で確認された廃棄土坑ＳＫ０４周辺からは、近世の陶磁器ほかが出土している。

第19図49～62、第20図72はＳＢ０１・０２などから出土した。以下順に説明していく。

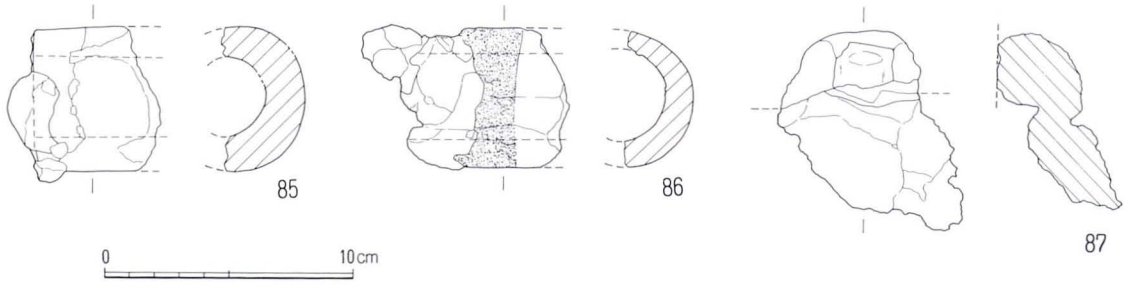
49は見込いっぱいに獅子と花草を描く皿である。口縁部付近には鋸歯状の文様が描かれているが、一部分絵付けのずれた箇所がある。染色は50・51と比較すると、やや薄い印象を受ける。50は口縁部が外反するもので、端反り碗と呼ばれるものである。外面には2種類の図柄が交互に描かれる。器壁は薄手のつくりである。51は50に似通った染付の図柄で、内面口縁部の図柄は同じモチーフを採用している。底部付近は50に比べやや厚い。52は筒型碗の口縁～体部片と考えられる。意匠はやや抽象的な感があるが、体部下方には同一文様が繰り返し描かれていたものと推測される。53は、同種のものがもう1点出土した。釉薬を弾かせて仕上げる技法を、図柄の一部に採用している。55・56は淡灰緑色の地に黒褐色で文字の染付をするもので、56の二片は同種の碗と思われる。55は「大森鉱」、56は「大森」・「田組」と読むことが可能であろう。藤田組は明治20（1887）年から石見銀山において「大森鉱山」として操業を行っており、これらの碗は当時社名や鉱区名を入れて生産させた注文品と考えられる。58は淡灰緑色を呈し、高台断面は台形に似る。59は壷ないし瓶の口縁部と思われるもので、時期は近世にさかのぼるであろう。60は内外面とも露胎である。61は外面底部近くまで施釉される。63はＳＢ０２内ＳＸ０９・ＳＸ１４の中間で出土し、内面には一部煤が付着している。第20図72は第16図の通り、ＳＢ０２東側から出土した。口縁部を折り返し



第20図　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物実測図②（陶磁器・土器・石製品）（S＝1／3）



第21図　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物実測図③（金属製品）（S＝1／2・1／1）



第22図　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物実測図④（製錬関連土製品）（Ｓ＝1／3）

表７　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物観察表③

図面番号	遺物番号	種別・器種	法量（cm）			技法／文様／その他	推定生産地	残存量
			現存長	最大幅	最大厚			
20	75	陶器・水滴	7.5	4	5	94.82 g		耳欠ける
	76	砥石	8.8	5.9	1	泥岩製／91.96 g		不明
	77	石製硯	13.6	7	1.7	泥岩製／208.43 g		ほぼ完形
21	78	鉄製和釘	14.1					ほぼ完形
	79	鉄製和釘	4.9					先端欠損
	80	鉄製タガネ？	18.2		2			上方破損
	81	棒状鉄製品	23.3		1.4	用途不明		上方破損
	82	鉄製枠材？	24.1	2.8	1	木質付着		一端欠損
	83	鉄製ノミ？タ	20.6	1.5	0.8			先端欠損
	84	銅製錘	2		0.9	11.37g／通し孔あり		完形

表８　栃畑谷Ⅱ区　出土遺物観察表④

図面番号	遺物番号	種別・器種	法量（cm）			技法／文様／その他	推定生産地	残存量
			現存長	外径	内径			
22	85	土製羽口	5.1	5.8	3.2	ガラス質の滓付着		先端部
	86	土製羽口	6.8	5.2	3	ガラス質の滓付着		先端部
	87	土製羽口	3.4					先端部

でつくり、肩部に櫛で施文している。体部内外面に接合痕が残っている。

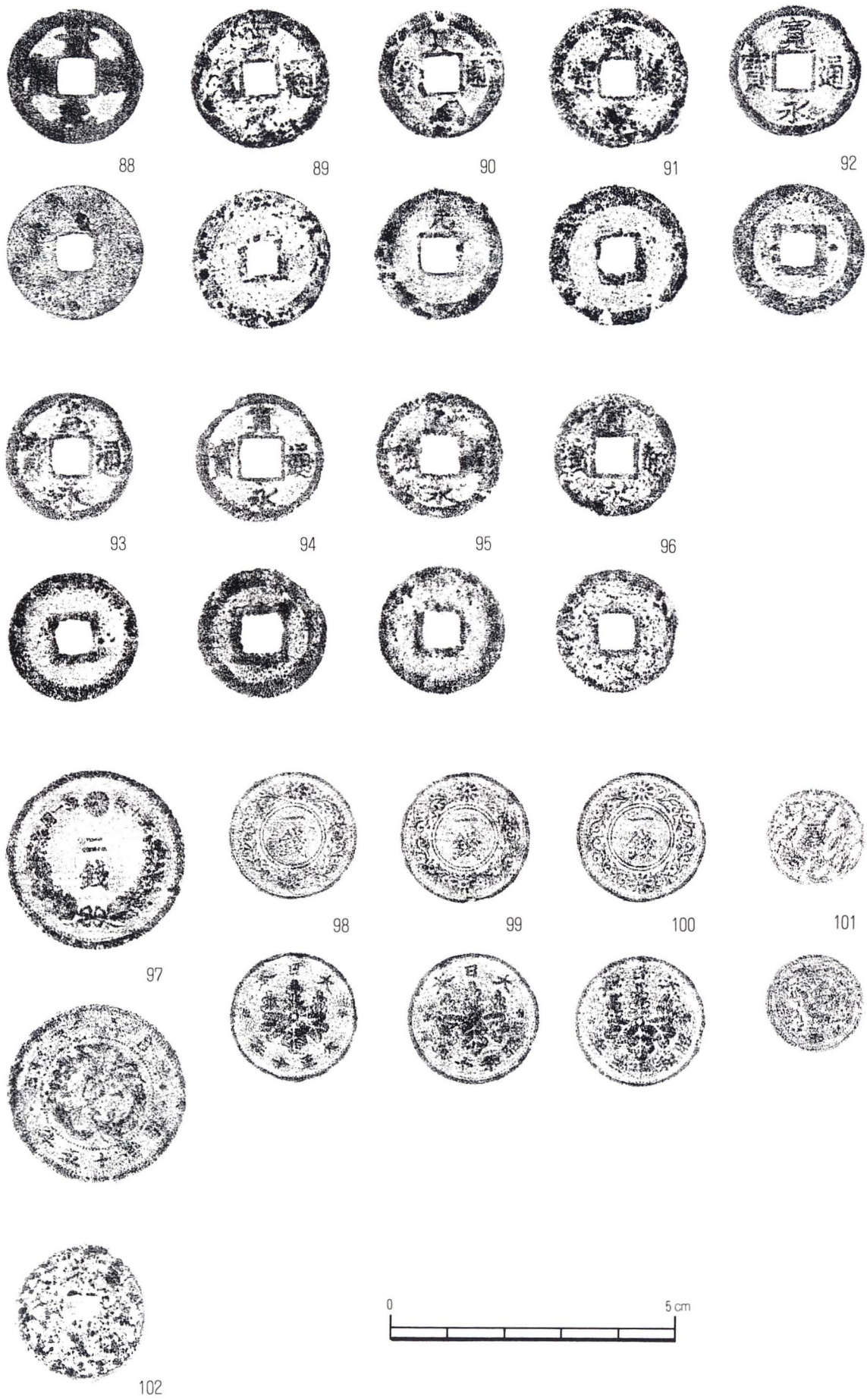
54・57・62は礎石建物部分外から出土したものである。54は外面が露胎であるため、内面がくぼむ型の蓋とみられる。内面中央部分は欠けており、おそらく付いていたと思われるつまみは確認できない。57は正円形の卸皿で、口縁部に１箇所ある掻き出し口部分は、やや薄いつくりである。62の内面には、擂目の上端が残っている。

これらの遺物には、近代以降に特徴的な染付技法を用いる碗・皿類があり、19世紀以降広く流通する石見焼も多く含まれる。こういったことから、遺物の主な時期は近代以降と考えられる。特に55・56の大森鉱山関連字句が染め付けされたものが、ＳＢ０１・０２の時期・性格を考える上で注目される。

第20図中の72を除く陶磁器・土師質土器は、調査区西側の掘り下げた下層やＳＫ０４から出土した。出土層序が第１遺構面と異なるため、ここで一括して取り扱う。64～66の時期は16世紀末から17世紀はじめにかけてと考えられる。67は直線的に開く体部を持ち、底裏の「福」字はかなり崩れて書かれる。67・71・73は整地層最下部から近接して出土した。68は18世紀後半以降のものと思われる。69は灰釉がかけられるものである。ＳＫ０４出土遺物の年代は16世紀末から19世紀にかけてと幅がある。土坑掘削・埋め立て時に下層の遺物が混入したものと推測される。

またＳＫ０４からは、猫を形どった75の水滴が出土している。背中右側の穴から水を入れ、口の部分から出したものであろう。

第20図76はＳＢ０１の包含層から出土し、77は表面採集したものである。どちらも表面は緑色を帯びる。76は砥面の反対側が割れた面であるため、厚さは不明である。77の背面には抉りが入れられ、文字の彫り込みがある。上方は



第23図　栃畑谷Ⅱ区　出土銭貨拓影（S＝1／1）

表９　栃畑谷Ⅱ区　出土銭貨観察表

図面番号	拓影番号	種別・器種	種別	初鋳年	法量（cm）			備考
					最小・最大直径（cm）	厚さ（cm）	重量(kg)	
23	88	表土	中国銭	不明	2．38：2．40	0．07～0．10	2．44	
	89	東西トレンチ、ズリ・カラミ層	古寛永	1636	2．44：2．45	0．11～0．17	3．07	
	90	精査	新寛永	近世	2．27：2．30	0．09～0．13	2．27	背面「元」字
	91	SX－05　埋土	新寛永	〃	2．49：2．50	0．09～0．16	2．24	
	92	排土中	新寛永	〃	2．32：2．34	0．12～0．13	2．43	
	93	精査	新寛永	〃	2．29：2．30	0．10～0．12	2．60	
	94	精査	新寛永	〃	2．29：2．30	0．09～0．11	1．87	
	95	精査	新寛永	〃	2．24：2．25	0．07～0．12	2．21	
	96	表土	新寛永	〃	2．18：2．21	0．11～0．16	1．72	
	97	精査中	二銭	明治15	3．17：3．21	0．21	12．42	
	98	表土	一銭	大正10	2．30	0．11～0．14	3．53	
	99	表土	一銭	昭和10	2．31：2．32	0．12～0．14	3．42	
	100	表土	一銭	昭和13	2．30：2．31	0．12～0．14	3．51	
	101	第１遺構面　精査中	一銭	不明	1．74：1．76	0．20～0．21	0．92	
	102	③	不明	不明	2．28：2．29	0．11～0．22	2．32	

「本谷」、下方は「本高島青石」と読むことができる。「本谷」は人名あるいは仙ノ山南側の本谷地区を指すものと考えられる。硯では近江高島硯が有名であるが、77が高島硯そのものであるかはよく判別しえなかった。

第21図の鉄製品は、みな第１遺構面の包含層より出土した。78は２箇所で折れ曲がっているが、復元した長さは14.1cmになる。79は先端を欠き、復元すると78の半分程度の長さであると思われる。80は先端がとがっていることからタガネの可能性がある。81は細身のもので、先端部は丸くおさめる。82に付着している焼けて炭化した木質は、本来のものである。83は先端部に剥離が見られ、遺存状況は芳しくない。断面長方形の身は中程が最も幅広になっている。これらの鉄製品はその用途によって、構造物を構成する78・79・82と80・81・83のような道具に分けられよう。図化したものの他にも、和釘をはじめ多くの鉄製品が出土している。

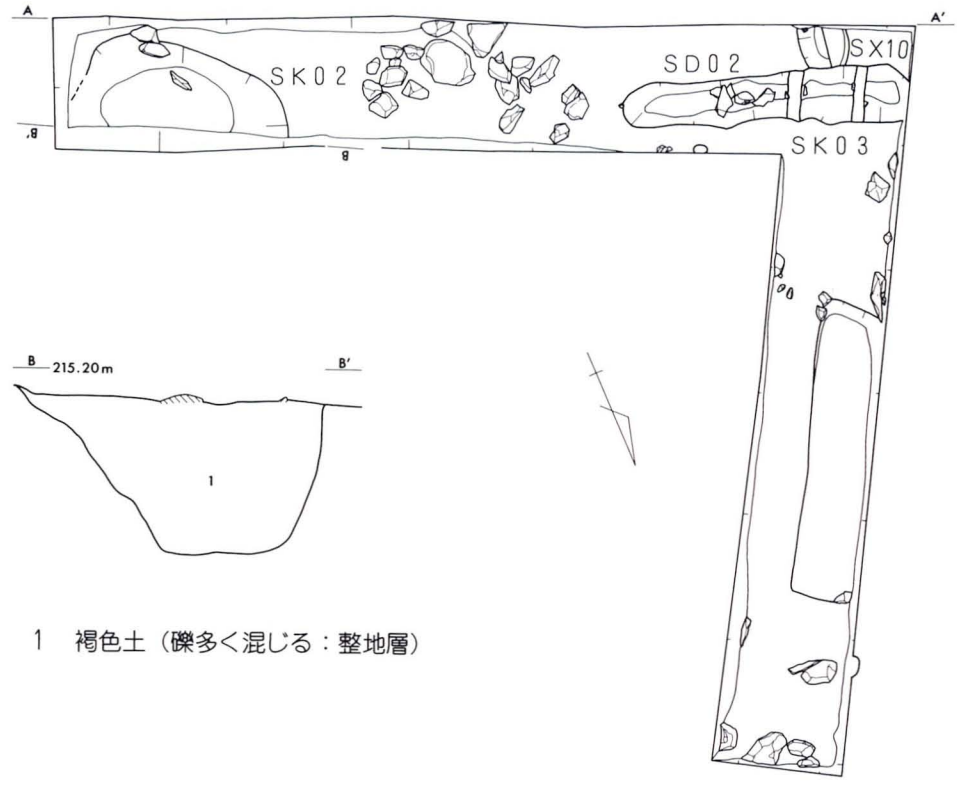
84は銅製錘である。つまみ部分の通し孔は直径１㎜程度である。11.37ｇは換算すると３匁３厘２毛となり、余分な付着物の重量を考慮すれば、３匁（11.25ｇ）用の錘であったと思われる。

第22図の土製羽口は、いずれもＳＢ０２西端からＳＤ０３にかけての範囲で出土した。85は端部の形状が比較的残っている。86は端部の被熱が著しい上、多量の滓が付着している。87は羽口内面がわずかに残るものである。表面観察から、縦断面右半が羽口本体、同左半が滓の部分であると推測される。これらは製錬作業に使用された後、廃棄されたものとみられる。

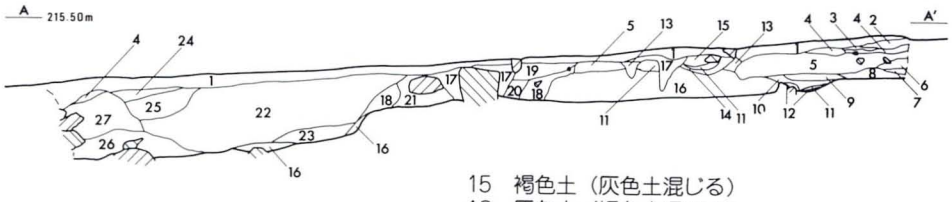
第23図Ⅱ区出土銭貨の内訳は、中国銭１点、寛永通寶銅一文銭９点、近代以降の銭貨が５点である。102は遺存状況が悪く判別ができなかった。ほとんどが第１遺構面からの出土である。88は表面が摩耗しており銭文の判別が困難であるが、下側の字は「元」と思われる。89はＳＢ０１南東部分の整地層より出土した。90は背文字が「元」の寛永通寶である。元禄10（1697）年から全国各地で増鋳が行われた際のものに、多種類の背文字を持つものがあるとされる。

(2) 下層確認トレンチ

本トレンチ（第24図）は、下層の状況を調査する目的で、ＳＢ０１の内側で遺構の密度が低い部分を選び設定した。最終的な規模は、幅１ｍで北東方向に５ｍ、南東方向に７ｍの「Ｌ」字状になる。調査はトレンチ北東部分の設定・掘削から始め、第１遺構面の調査区壁面にそろえるかっこうで南東部分へ向けてトレンチを延長した。北東部分から南東部分西側にかけての層序からは、古い時期の遺構が掘り込まれた灰色粘質土層が西から東へ向けて傾斜して堆積し、北側へはやや落ち込んでいることが見てとれた。調査はこの灰色粘質土層上面までを掘削して行った。北東部分ではさらに下層を確認するため、部分的に地表面から約80cm下まで掘り下げている。が、灰色粘質土層以下では遺構・遺物を確



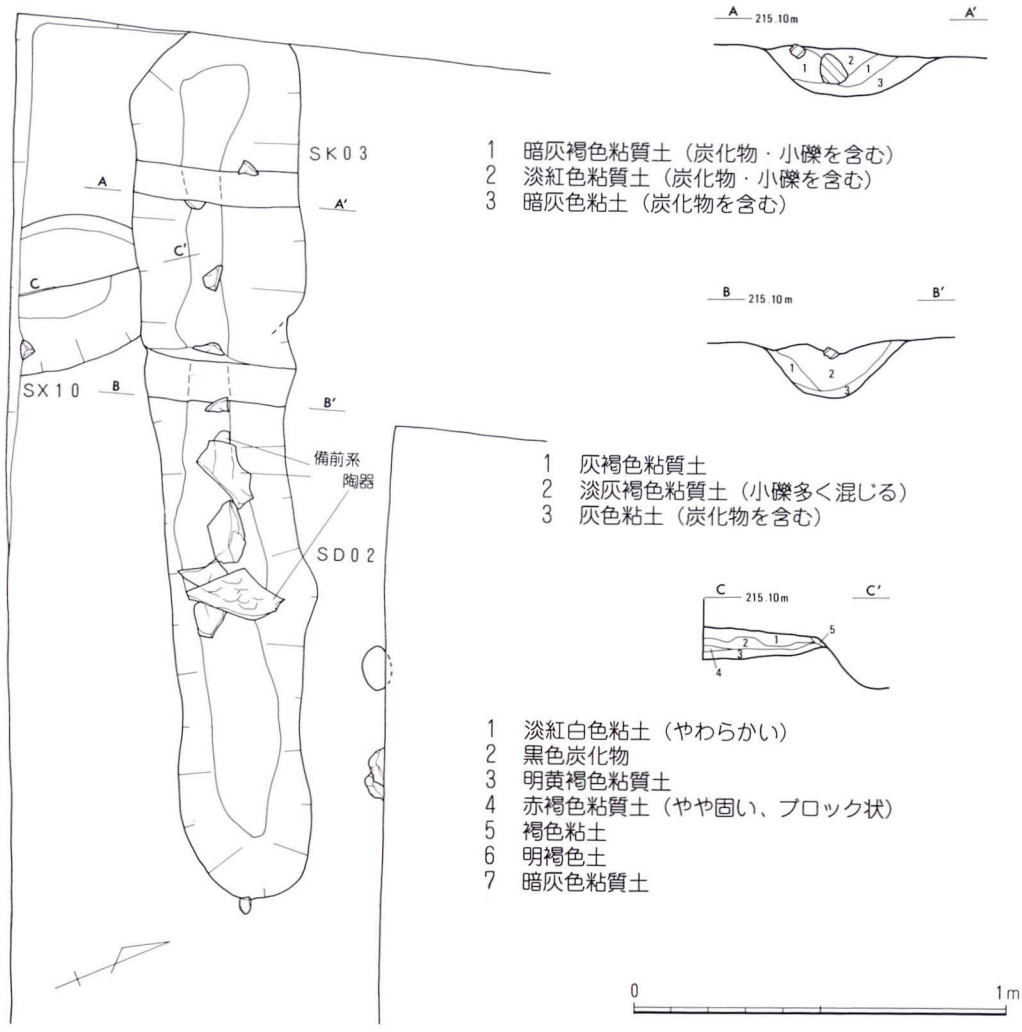
1　褐色土（礫多く混じる：整地層）



1　黒褐色土
2　明灰褐色砂混じり土
3　暗赤褐色土（固く締まる）
4　暗褐色土
5　黄褐色土（小礫混じる）
6　明灰褐色砂混じり土（炭化物を含む）
7　暗紅色粘質土
8　暗褐色土（灰色土混じる）
9　暗灰色粘質土（褐色土混じる）
10　淡紅白色粘土（やわらかい）
11　黒色炭化物
12　明黄褐色粘質土
13　灰褐色土
14　灰色粘質土（炭化物を含む）
15　褐色土（灰色土混じる）
16　灰色土（褐色土混じる）
17　灰褐色砂混じり土
18　灰褐色土（炭化物を含む）
19　黄褐色砂混じり土
20　褐色土（黄橙色土混じる）
21　褐色土（橙色土混じる）
22　褐色土（礫多く混じる：整地層）
23　褐色粘質土（礫混じる）
24　黄褐色土（小礫・炭化物混じる）
25　暗褐色土（カラミ多く混じる）
26　明灰色土（褐色土混じる）
27　灰黄色土（褐色土混じる、やや締まる）

0　2m

第24図　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　平面・土層図（Ｓ＝1／60）



第25図　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　遺構平面・土層図（S＝1／20）

認できなかった。なお、トレンチ南側及び東端は用地境界に隣接するため、拡張して調査することはならなかった。

本トレンチの調査では、第１遺構面基盤層（褐色土）の下に堆積していた灰黄色土層および灰色粘質土層の上面にて、遺構面をそれぞれ確認した。第24図は２時期の遺構面のうち、より古い下層遺構面について実測したものである。土層断面を観察すると、層序の違いによってトレンチ内は北東部分・南東部分西側・ＳＫ０２付近の３箇所に分けてとらえられる。

【北東部分】北東部分では、ＳＢ０１基盤層（褐色土）を掘削の途中で直径10㎝程度の柱が何本か残存していることが確認された。これらは第１遺構面の礎石とは重ならず、若干ずれた場所に位置する。第１遺構面の礎石上面の柱痕跡とは大きく異なるため、ＳＢ０１の建物壁を構成する柱の可能性も考えられる。基盤層の下層には灰黄色土層が広くみられたが、この部分で遺構は確認できなかった。さらに下層の灰色粘質土層は北へ向けて落ち込み、相対的に灰黄色土層が厚くなっていた。第１遺構面の建物・遺構配置や層序なども考えあわせると、灰黄色土層は近代の整地層と考えられる。

【南東部分西側】南東部分西側では、上層と下層２面でそれぞれ遺構を確認した。上層では、「Ｌ」字の角部分に製錬関連遺構が存在した。これは明瞭なプランをもたないが、被熱部分が目立って集中している点、製錬関係遺物が出土した点により判断した。特に注目されるのは混入物が無い粘土がかなりの範囲で残っている点で、この種の粘土は製錬関連遺構に使用される事例が多いという。他にトレンチ東端へ向けて溝状遺構１基を検出した。長さは2.5ｍ程度で

表10　栃畑谷Ⅱ区下層トレンチ　出土遺物観察表①

図面番号	遺物番号	種別・器種	法量（cm）			技法／文様／その他	推定生産地	残存量
			口径	底径	器高			
26	103	青磁・瓶	6.4				中国	口縁部片
	104	白磁・皿	8.9	4.7	2.7		中国	40%
	105	白磁・皿		6.2			中国	底部片
	106	白磁・皿		6.2		碁笥底	中国	底部片
	107	染付磁器・皿				全体に被熱	中国	口縁部片
	108	染付磁器・皿		6.4			中国	底部片
	109	施釉陶器・瓶	11.8			鉄釉／黒褐色	中国	口縁部片
	110	陶器・擂鉢					備前	口縁部片
	111	土師質土器・皿	7.1	4.7	1.6	回転ナデ	在地	15%
	112	青磁・皿	9.9	4.3	2.5		中国	40%
	113	染付磁器・皿	13.4				中国	口縁部片
	114	染付磁器・皿		6.8			中国	底部片
	115	染付磁器・皿		4.8		饅頭心／見込花文・底裏銘あり	中国	底部片
	116	施釉陶器・皿		4.8			肥前	底部片
	117	施釉陶器・壷	12.6				肥前	口縁部片
	118	青磁・碗				鎬蓮弁文	中国	口縁部片
	119	白磁・皿		5.8			中国	底部片
	120	白磁・皿	12	6.8	2.9		中国	40%
	121	磁器・皿	13.2					口縁部片
	122	染付磁器・碗				鳥を描く／全体に被熱	中国	口縁部片
	123	染付磁器・皿				全体に被熱	中国	口縁部片
	124	染付磁器・皿	12.2			全体に被熱	中国	口縁部片
	125	染付磁器・皿					中国	15%
	126	染付磁器・皿	21.8				中国	口縁部片
	127	施釉陶器・皿		5.8		見込蛇ノ目釉剥ギ	肥前	底部片
	128	陶器・擂鉢					備前	口縁部片
	129	陶器・擂鉢				わずかに擂目残る	備前	口縁部片
	130	陶器・擂鉢	23.6				備前	口縁部片
	131	土師質土器・皿	7.2	3.7	2	回転ナデ／表面磨耗		35%
	132	土師質土器・皿	7.8	4	1.3	回転ナデ／内面煤付着		25%

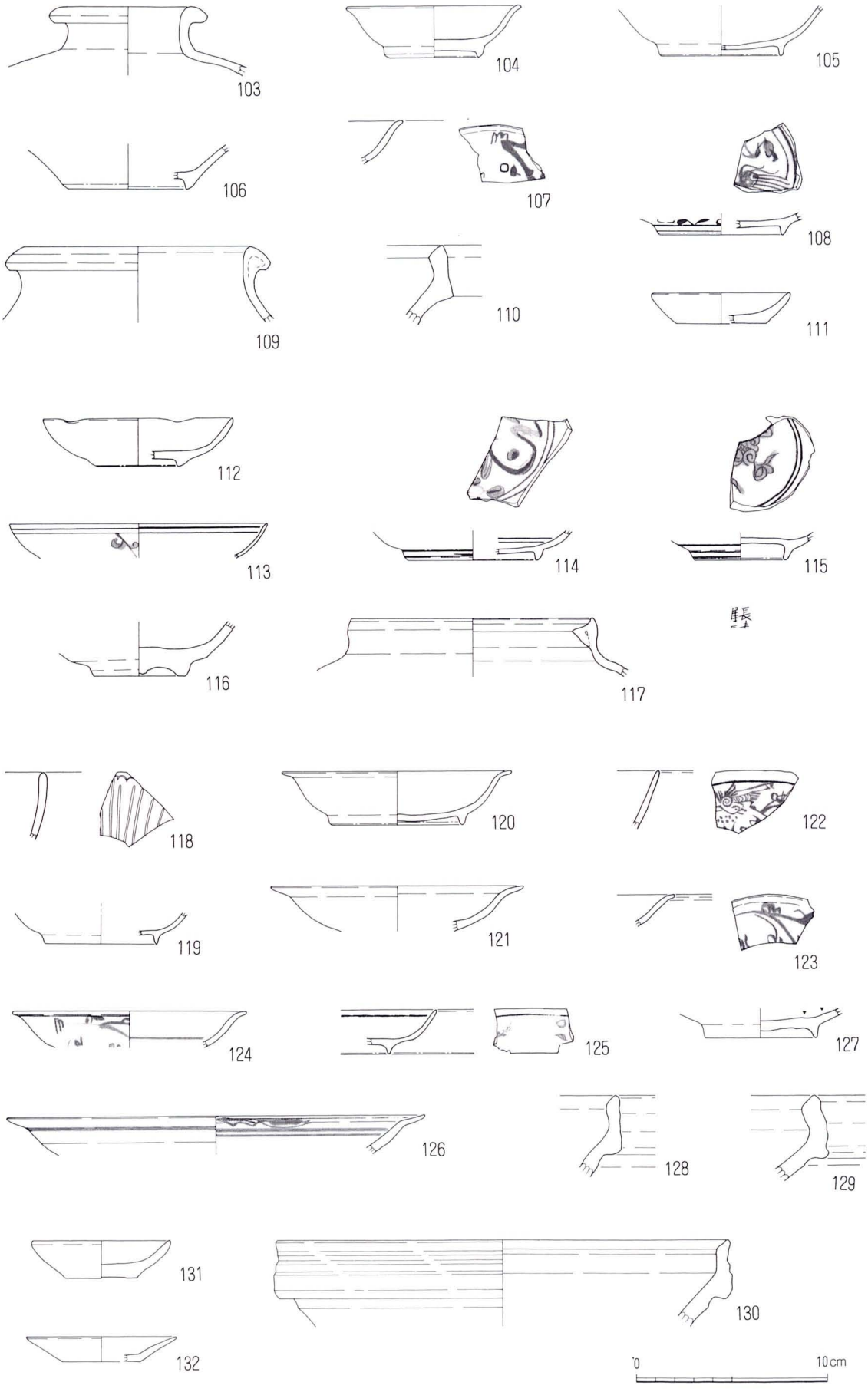
あるが、ごく浅く幅も狭い。遺物の出土はない。

次に下層では、溝状遺構１基・土坑２基・ピットを検出した。（第25図）これらの遺構は固く締まる灰色粘質土層に掘り込まれていた。調査は土層観察用の畦を残して掘り上げた状態まで行い、断ち割りなどさらに下層の調査は実施しなかった。ＳＤ０２は、長さ1.5ｍ以上、幅約80㎝、深さ15～20㎝である。埋土には小礫が多く含まれる。ＳＫ０３は長さ90㎝以上、幅約40㎝、深さ15～20㎝である。２層は被熱しているようにも見受けられ、上層製錬関連遺構の影響を受けた可能性もある。ＳＤ０２を切っており、より新しい遺構である。ＳＸ１０は長さ約35～40㎝、幅約40㎝、深さ10㎝程度であり、やや楕円形の平面プランになると思われる。製錬炉として考える場合、３層は掘り方内に貼られた層で、炉内の堆積層が１・２・４層となる。ＳＤ０２同様ＳＫ０３に切られているが、ＳＤ０２より古いことも考えられる。

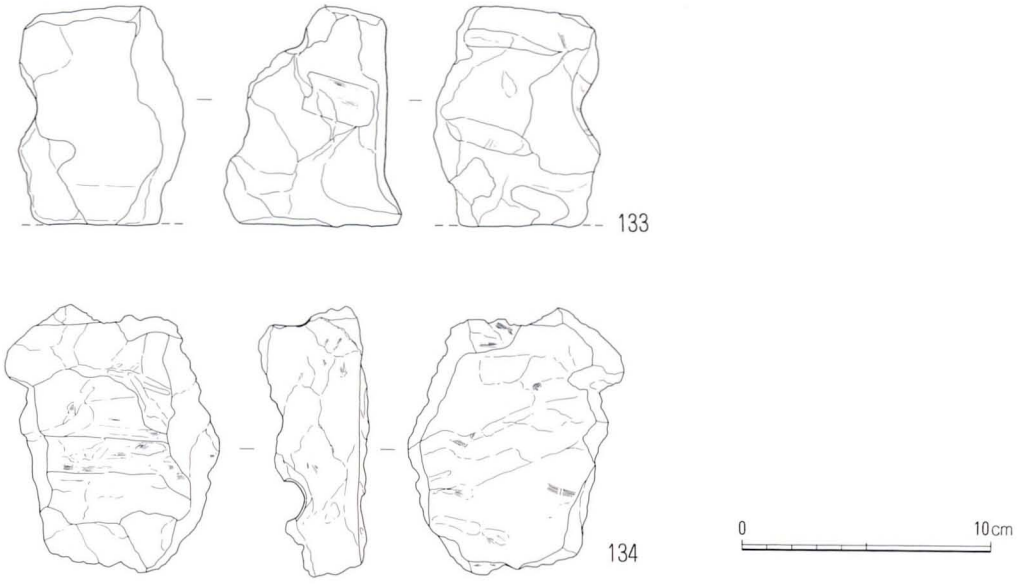
【ＳＫ０２】ＳＫ０２（第24図）は、第１遺構面より掘り込まれた廃棄・整地土坑である。ＳＫ０２も含めこの付近では、下層の遺構・遺構面は破壊されていたと考えられ、他の２箇所のようなより古い時期の遺構面は確認できなかった。ＳＫ０２の第１遺構面からの深さは約1.2ｍで、本来は長軸の長さが２ｍ以上とみられる。遺物は土坑の底近くから出土した。

【下層確認トレンチ出土遺物】本トレンチから出土した遺物のうち、図化できたものを第26・27図に掲載した。胎土が陶器質の粗製青花碗皿類が見られない点、被熱したものが多く認められる点、袋物などが含まれている点が特徴である。遺物の時期は、数点を除いて15世紀後半から16世紀中葉までの範囲内におさまり、第１遺構面出土の遺物とは時期が重複しない。

103～111は、ＳＤ０２から出土した。103はやや特殊な形状の口縁部を持ち、非日常的色彩が強い。14世紀後半から15世紀初頭の年代が与えられる。104～106は白磁皿で、104は森田分類Ｅ－２－ｂ類に、106はＥ－３類に属する。



第26図　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　出土遺物実測図①（陶磁器・土器）（S＝1／3）



第27図　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　出土遺物実測図②（製錬関連土製品）（S＝1／3）

表11　栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ　出土遺物観察表②

図面番号	遺物番号	種別・器種	法量（cm）			技法／文様／その他	推定生産地	残存量
			現存長	最大幅	最大厚			
27	133	土製障壁	7.2	6.7	8.8	半円筒状の圧痕あり		不明
	134	土製障壁	10.9	8.7	4.5	半円筒状の圧痕あり		不明

ほかに図化しなかったが、染付磁器碁笥底皿・中国製褐釉四耳壷肩部片・李朝白磁皿・備前系陶器甕やてづくねの土師質土器皿が埋土より出土している。主な遺物の時期は16世紀中葉とみられるが、14世紀後半から15世紀初頭の袋物などが混じっている。これらは伝世品が他所から搬入されたのであろう。後述のＳＫ０２・０３などと比較して遺物の出土量は多く、一括廃棄されたことも考えられる。

ＳＫ０３からは、図化しなかったが16世紀代の黒釉四耳壷肩部片や白磁小片が出土した。

112～117は、ＳＫ０２から出土した。112・115は16世紀半ばのもの。115の底部外面の銘は、「長寿□□」と推測される。117は蓋とセットになるものであろう。18世紀以降に下る時期の遺物は含まれなかった。

118～132は、トレンチ上層および包含層から出土した遺物である。トレンチ上層出土遺物では、127が北東部分から、124が備前系陶器甕片とともに南東部分の製錬遺構近くから出土した。また包含層のうち、ＳＫ０２付近の礫混じり整地層から118・125・130～132が出土した。130は間壁編年Ⅴ期のものであろう。132は内面に煤が付着して黒くなっている。120は小野分類Ｃ群の白磁皿。121は灰白色を呈し、陶器質の胎土である。内外面に貫入が多くみられる。
126は口縁部が外側へ向けて折れる特徴を持つ、小野分類Ｆ群の皿である。これらの遺物の時期には幅があるものの、およそ16世紀後葉から17世紀前半と考えられる。

第27図133・134は製錬作業にかかる遺物と推測されるもので、133は上層製錬遺構から、134はＳＫ０２の埋土から出土した。いずれも強く被熱し全体の色調は赤橙色である。それぞれ平坦な面を１・２箇所と、半円筒状の圧痕を数ヶ所持つ。133・134は炉の周辺で用いられた土製の障壁（炉壁）であると考えられよう。